

- 弥生時代～ 調査区の中央には、谷状地形が存在し、調査区北東端でその最上部確認した。ここから  
 古墳時代 尾根は分岐するが、住居跡等の遺構が確認されたのは西側の尾根上である。
- 西半部で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居が8棟検出されたが、全体のプランが残存していたのは4棟である。
- 竪穴住居SB01 4.0m×4.6mの方形の竪穴住居で、4本柱である。床面直上まで削平されており、尾根側の西壁部で約10cm、谷側の東壁部では、2～5cm程度、壁面の立ち上がりが残存していた。一部に焼土と炭が検出された。出土遺物は細片が多く、時期を明確にしがたいが、古墳時代初頭頃の住居であると考えられる。

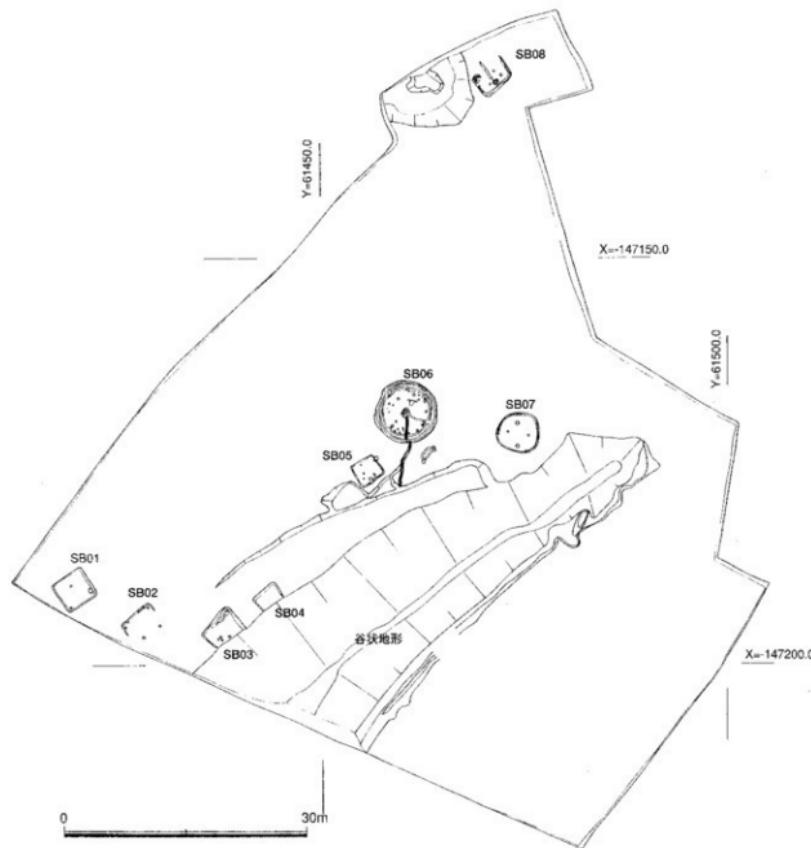


fig. 510 調査区平面図



fig. 511 調査区全景

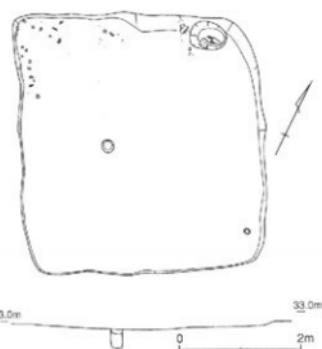


fig. 512 SB01 平面図・断面図



fig. 513 SB01

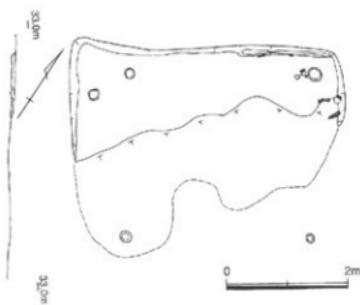


fig. 514 SB02 平面図・断面図

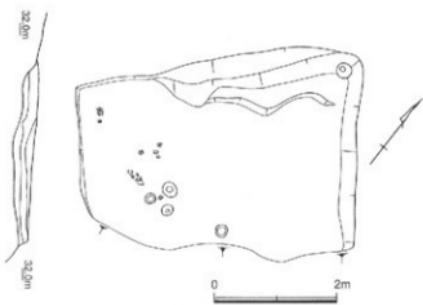


fig. 515 SB03 平面図・断面図

- S B02 4.4m×3.5m以上の方形の堅穴住居で、4本柱である。床面直上まで削平されており、尾根側の西壁部で約10cm、谷側の東壁は完全に失われている。柱穴の検出状況から、東西方向約4.0mのプランであると考えられる。一部に焼土と炭が検出された。出土遺物は細片が多く、時期を明確にしがたいが、古墳時代初頭頃の住居であると考えられる。
- S B03 4.6m×3.0m以上の方形の堅穴住居である。尾根側の西壁部で約10cm、壁面の立ち上がりが残存していたが、谷側は削平されて残っていない。柱穴、中央土坑等の存在は確認されなかった。時期を特定できる遺物の出土がなく、時期は不明である。
- S B04 3.2m×2.0m以上の方形の堅穴住居である。尾根側の西壁部で約10cm、壁面の立ち上がりが残存していたが、谷側は削平されて残っていない。柱穴、中央土坑等の存在は確認されなかった。時期を特定できる遺物の出土がなく、時期は不明である。
- S B05 3.1m×2.9mの方形の堅穴住居である。柱穴は確認できなかった。炭化材及び焼土が良好に残存しており、屋根に葺かれていた植物遺体も一部残存していた。古墳時代初頭の住居である。

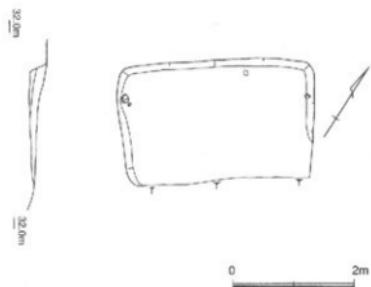


fig. 516 SB04 平面図・断面図



fig. 517 SB04

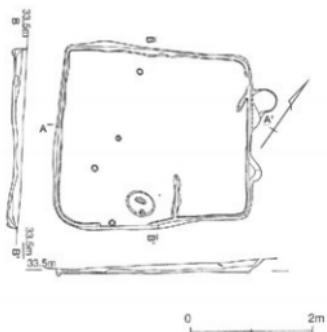


fig. 518 SB05 平面図・断面図



fig. 519 SB05 炭化材検出状況

- S B06**
- 拡張前 古墳時代初頭の竪穴住居で、拡張している様子が窺える。拡張前の住居は直径6.0mの円形で、7本柱と考えられる。周壁溝が全周する。時期を特定できる遺物の出土はない。
- 拡張後 直径7.4mの円形に拡張されており、拡張前の周壁溝は埋められている。8本ある柱のうち3本は、拡張前の埋められた周壁溝の上に立てられている。周壁溝の西側部分は一部2重になっている。東側には屋外に排水するための溝が設けられている。
- 中央土坑 長径1.2m、短径1.05m、深さ0.77mの規模で、土坑内には焼土、炭などが検出されたが、壁面は火を受けた痕跡はない。中央土坑に繋がる溝の壁面に火を受けた痕跡が残る。
- 中心から放射状に掘られた幅10cm、深さ18cmの溝である。遺物は出土していない。屋内を区画するために設けられた可能性がある。
- S B07** 直径4.7mの古墳時代初頭の円形竪穴住居で、4本柱である。周壁溝が全周する。

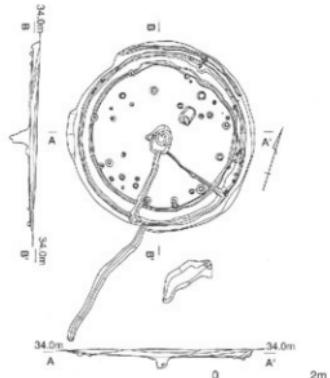


fig. 520 SB06 平面図・断面図



fig. 521 SB06

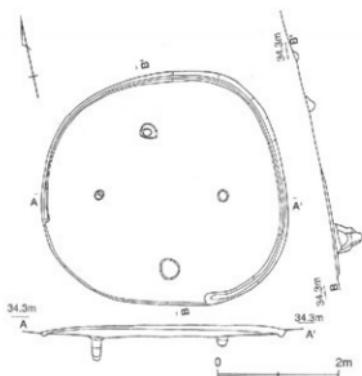


fig. 522 SB07 平面図・断面図

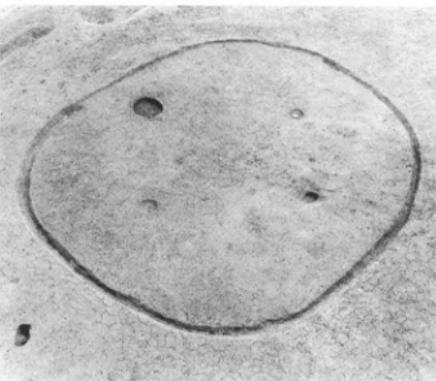


fig. 523 SB07

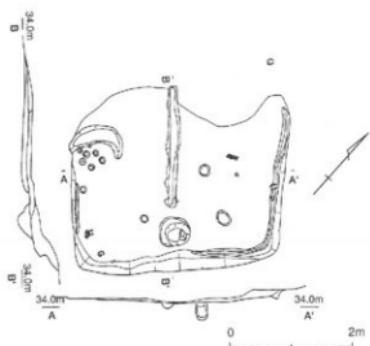


fig. 524 SB08 平面図・断面図



fig. 525 SB08

**SB08** 4.4m×3.9mの方形の竪穴住居である。尾根側の東壁部で約20cm、壁面の立ち上がりが残存していたが、谷側の壁は失われている。残る3辺には周壁溝が存在する。土坑は尾根側の壁際にあり、焼土・炭が出土している。柱穴と特定できる遺構はなく、構造は不明である。弥生時代後中期から古墳時代初頭の遺物が少量出土している。

### 3.まとめ

今回の調査は、谷状地形と、その西側の尾根部に設営された8棟の住居が検出された。そのうち2棟は住居と断定しがたいが、規模等から住居である可能性が高い。東側の尾根部では遺構が全く確認できなかったが、谷部の遺物の出土状況から、本来は存在したと考えられる。遺物が未整理であるため、それぞれの住居の共存、前後関係等の検討は今後に残されたが、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落の立地を示す1例となった。



fig. 526 調査地全景（南上空から）

## まるづか 62. 丸塚遺跡

### 1. はじめに

当該地は、区画整理事業の計画が進められており、事業地内の埋蔵文化財の有無について平成5年度に試掘調査を実施した。その結果、北側については弥生時代の遺構及び遺物包含層が確認され、南側については弥生時代の遺物包含層は確認できなかったが、条里遺構が存在する可能性が指摘された。

平成7年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災の復旧・復興に伴い、住宅地の確保がさらに急がれることとなった。平成8年2月に行われた確認調査では、今回の調査区の北側に微高地が確認され、中世の遺構面と弥生時代から古墳時代の堅穴住居跡や土坑などの遺構が検出されている。また、平成8年5月には道路建設部分の1500m<sup>2</sup>について全面調査をおこない、中世後半（室町時代）の掘立柱建物跡数棟・柵・溝などと弥生時代の堅穴住居跡7棟・柱穴・土坑・溝などが検出されている。

平成8年12月には、条里遺構が存在する可能性が指摘されていた南側について確認調査を実施した。その結果、中世以前の洪水堆積に覆われた水田跡が検出された。

今回は遺跡範囲確認調査の結果を受けて、遺構面に影響を及ぼす道路予定地部分の3600m<sup>2</sup>について全面発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることとした。

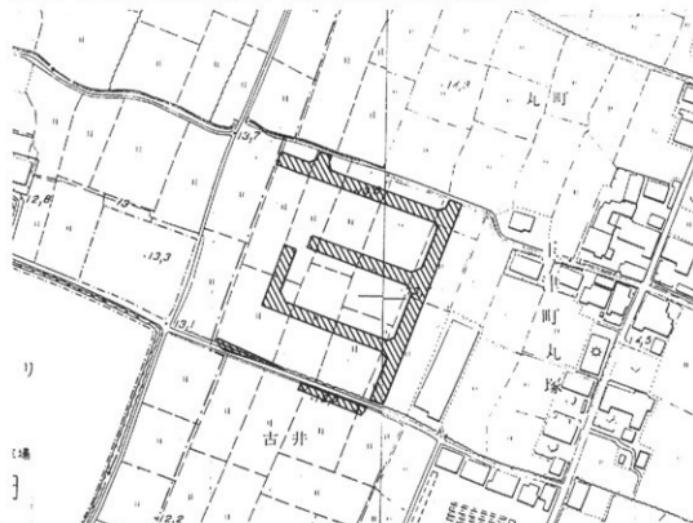


fig. 527  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

丸塚遺跡は櫛谷川と明石川との合流点の北側に広がる、標高12~15mの平野部に位置する。これまでの発掘調査により、中世後半（室町時代）・古墳時代・弥生時代の遺構や遺物が検出されている。隣接地には、居住遺跡や玉津田中遺跡が広がり、明石川を挟んで出合遺跡が、櫛谷川を挟んで今津遺跡が所在し、一帯が遺跡集中地域となっている。

**調査の方法** 今回の発掘調査は、道路予定地部分を①～⑨地点に区分し、①～④地点・⑥地点の一部・⑦地点について実施した。なお、検出遺構の位置を表示するに磁北に合わせた10m×10mの区画を設定し、北から南へA・B・Cとし、西から東へ1・2・3・…とした。

**基本層序** 調査地の基本層序は以下のとおりである。(fig. 528)

第1層、暗黒灰色粘質土の近現代の耕作土である。第2層、近世の陶磁器片を少量含む。淡灰褐色粘質土で、おそらく近世の耕作土と考えられる(第1遺構面)。

第3層、灰色～灰褐色粘質土上で、ごく少量の東播系と思われる須恵器が出土している。鉄分沈着層を確認でき、耕作土の可能性が高い。第4層、灰色粘質土(微砂)で、全域で安定して確認することはできない(第2遺構面)。このため一部では第2と第3遺構面は明確に分離できない部分がある。

第5層、黄褐色洪水砂礫層である。調査区の全域を覆っている(第3遺構面)。第6層は、灰色の洪水砂礫層で、この下層から水田畦畔(上層水田・下層水田)を検出した。

第7層、水田(第4遺構面、上層水田)である。灰色～淡灰色粘質土、あるいは粘土であるが、その大半は洪水砂(5・6層)によって削平されており、確認できたのは6地点の北部と南部の一部に限られる。

第8層、上層水田と下層水田の間の灰色洪水砂層である。S X21ではこの8層が埋土となっていた。第9層、水田(下層)で、灰褐色～灰色粘質土ないし粘土である。

第10層、水田(下層)以前の褐色粗砂の洪水層である。6地点北半では確認できたおらず、調査区全域を覆う洪水ではなかったものと判断できる。

第11層、淡灰色～青灰色粘質土である。直上が9層となる部分が多く、畦畔を検出することはできなかったが、この層が水田として使用された可能性は否定できない。

第12層、淡灰白色粘質土。第13層、灰色～淡灰色粘土。第14層、青灰～暗灰色粘土。

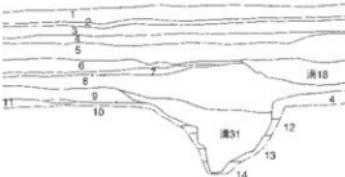


fig. 528 調査地土層断面図

**各時代の状況** 第2層内に河原石を用いて築いた暗渠排水遺構を検出した。幅20cm、深さ25～30cmの溝

**近世** を掘削した後、15cm大の細長い礫を平行に並べ、その上に30cmの間隔をおいて同様の礫を横に渡している。その上を8cm大の円礫で覆い、さらに3cm大の小礫を被せてある。平面プランを完掘したわけではないが、現在の水田に沿って「T」の字もしくは「II」の字がたまにつくられている。余分な水を主排水施設に流し込むものではなく、地面にしみ込ませる為の施設であると考えられる。

暗渠排水施設から江戸時代後期の陶磁器が出土したことと、現在の耕作土が全く入り込んでいないことから、江戸時代後期につくられたものであると考えられる。暗渠排水施設は、今回の発掘区域内だけでなく広範囲にみられることから、個人で作業したのではなく共同体主導のもとで敷設されたと考えられる。

江戸時代には享保の改革以降全国的に新田開発が盛んにおこなわれるが、丸塚集落の成立を含め関連性があるは、文献資料と併せて追求してゆくことが今後の課題である。

**中世** この時代の遺構は4層上面あるいは5層（洪水層）上面で検出できる。実際には中世の遺構面は2面あるのもと考えられる。しかし、4層は全域で検出することができないため、中世と考えられる遺構の大半は明確に分離することができない。

**獨立柱建物** 中世の遺構は、調査区北半では溝を数条、南半では獨立柱建物2棟以上と土坑を検出した。C10区の溝5は幅5m、深さ0.9mの規模で、断面は浅い「U」字形である。D12区で検出した溝6の断面形及び、埋土は溝5と酷似しているが、溝6は袋状に収束する。これと同様な溝（正確には土坑とするべきか）は調査区内の数カ所で確認できる。いずれも埋土は灰色系の粘土、もしくは粘質土で、流土は弱いか流れてい可能性が高い。

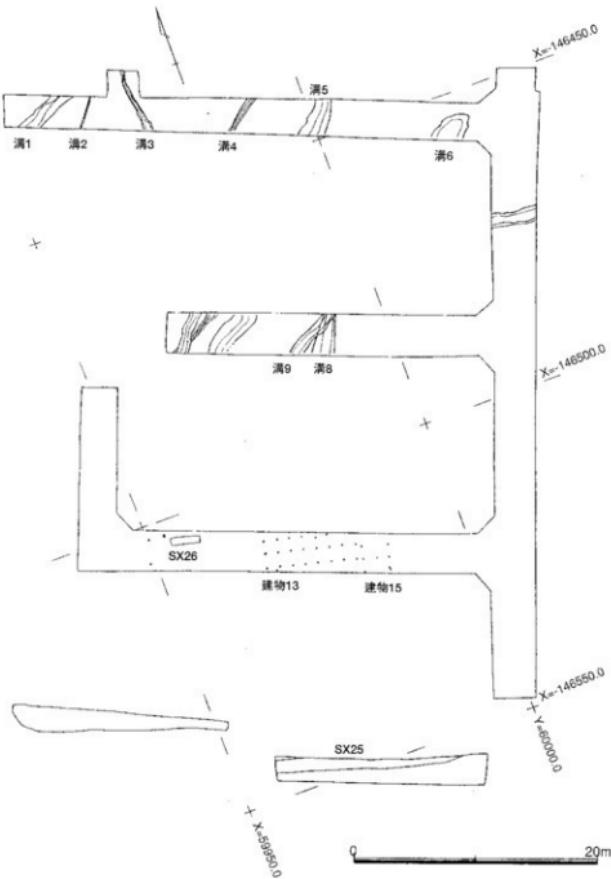


fig. 529 中世遺構面 遺構平面図

**掘立柱建物13** J 7 区では掘立柱建物を 2 棟以上検出した。建物13は 4 間×7 間の総柱建物である。建物は部材を抜き取ったらしく、ピット内に明確に柱痕跡を確認できるものはなかった。ピット埋土からは土師器皿、須恵器、珪化木、柱部材、木片、木皮などが出土した。これらはほぼ同様な位置から出土することから、建物廃絶時に何らかの祭祀が執り行われたものと考えられる。遺物の時期は12世紀後半に属する。

**S X26** 建物13の西側に主軸をそろえて S X26がある。S X26は長さ 5 m、幅約 1 m の長楕円形の土坑で、木製品や獸骨とともに多くの土器が出土した。遺物は土坑の東側の最下層からまとまって検出された。

出土した土器は完形率が高く、いずれも正位置で、一部は積み重ねられた状態で出土している。木製品は薄い板状の羽子板に似た形状をしていること。獸骨も下顎骨が入っていること。土坑は人為的に、かつ短期間に埋め戻されていることなどから、この土坑が祭祀土坑であった可能性が高いと考えられる。この土坑から出土した遺物は、12世紀中頃のものであり、建物13が機能していた時期に併行する。



fig. 530 掘立柱建物 SB13 検出状況

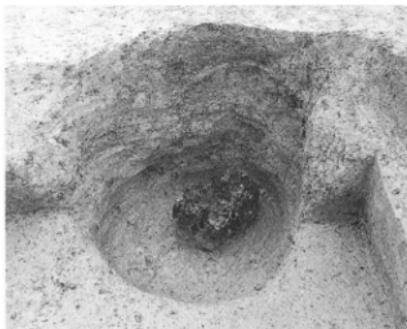


fig. 531 掘立柱建物の柱材検出状況



fig. 532-1 土坑 SX26



fig. 532-2 土坑 SX26 遺物出土状況

**古墳時代初頭** 5、6層以下に洪水砂礫層に覆われた状態で検出された。D12区周辺とK10区の一部については上層と下層の二面の遺構面がある。検出された遺構には、畦畔で区画された水田、断面「V」字形の溝、道状遺構などがあり、遺物には埋設された土器がある。

**水田** 上面と下面を併せて少なくとも76面の水田が検出された。水田は調査区南側でとぎれており、現段階では水田域の南東端と考えているが、大畦畔になる可能性もある。この場所から体部のはば半分を欠く長頸の壺形土器が出土している。時期は庄内期に属する。

水田は幅15~20cm、高さ10~15cmの畦畔で区画されたものであり、9m<sup>2</sup>~29m<sup>2</sup>までの広さがみられる。水口ははっきり持つものではなく、自然にオーバーフローさせていたものと考えられる。畦畔は断面が半円形のものとレール形をしたもののがみられる。畦畔の接続部分は上層面が「T」字形であるのに対し、下層面では「Y」の字形に接するという違いが見られた。無数の足跡が検出したが、稻作に係わる行動を復元できるものはなかった。

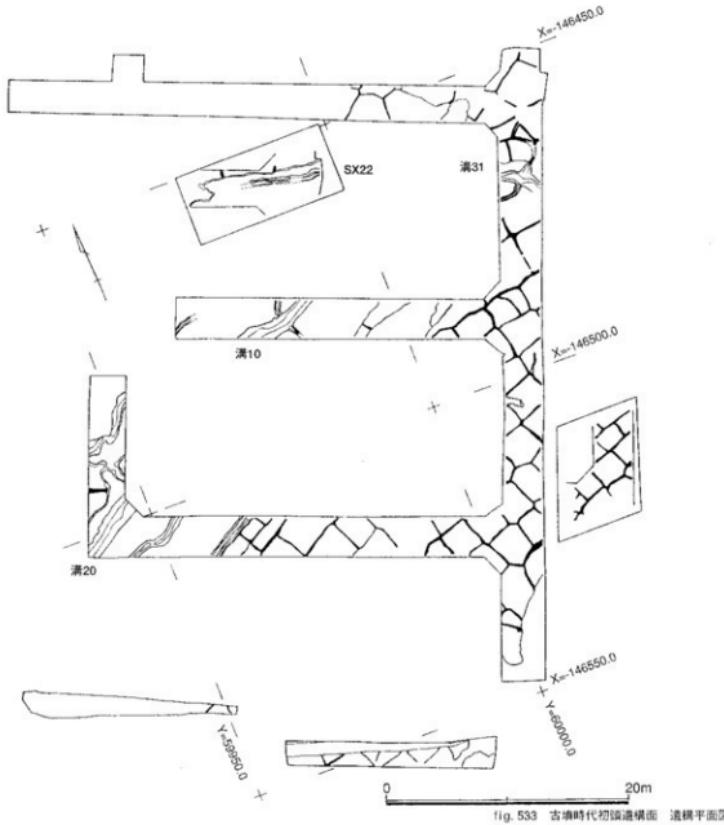


fig. 533 古墳時代初頭遺構面 遺構平面図



fig. 534 古墳時代初頭遺構面 全景



fig. 535 古墳時代初頭遺構面 水田

溝 E 8 区（溝10）・G 4 区（溝20）・E 12区（溝31）で検出された。断面の形状および埋土の堆積状況から同一の溝であると考えられる。上面の幅 2 m 下面の幅 0.2 m、深さ 1.5 m の断面「V」字形をなし、下流の溝20では幅、深さとも規模が大きくなっている。溝両側には、明瞭な形態ではないが大畦畔状の盛り上がりが認められ、その外側に不定形の湿地状の空間をおいて水田が造られている。溝10と溝31には両側から流れ込む小溝が直交して取り付いていた。また、溝31の北側の大畦畔内には、庄内期に属する複合口縁壺の一個体分の一部分が埋設されており、水辺での祭祀が行われていたことが窺える。

道状遺構 D13区から東西にのびる幅 1.5 m の道状遺構が検出された。両側の路肩はわずかに盛り上がりしており、水田面からの比高は 12 cm を測る。南側には幅約 1 m、深さ約 10 cm の溝が道状遺構に沿って掘られている。その下層、側溝の真下にあたる部分から工具痕（S X24）が検出された。幅は 8 ~ 15 cm で先端は「U」の字形をしている。地面に対して 47° ~ 65° の角度で掘り込まれており、土に接する面は平らである。おそらく金属製の刃先を持つ鋤を用いて掘られたものであると考えられる。

### 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代初頭・古代末～中世・江戸時代後期の 3 面が検出された。

古墳時代初頭（庄内式期）の文化層は、小畦畔で区画された水田が確認され、水田の取排水に関わる大溝も検出や、それに取り付く不定形な湿地状の空間が存在することもわかった。大溝沿いの大畦畔内には複合口縁壺が埋納された祭祀の場も検出された。特筆すべきことは、道状遺構（S X22）に沿う溝（溝23）を掘ったときの工具痕（S X24）が検出され、「U」字形をした金属製の刃先をもつ鋤であることが復元できた。今回調査した範囲の地域は、古墳時代初頭には生産域であったことがわかり、これまでの調査によって集落は北側に形成されていることが確認されているので、道状遺構が集落へ続いているかどうかが当時の景観を復元する上で興味深い問題である。

中世の遺構面は、周辺よりも標高の高い位置に形成されている。検出された掘立柱建物は、その廃絶に際して柱を抜きとり、掘形内に土器や柱部材の一部などを入れており、当時の建物建て替えに対する意識を知る上でも重要である。

事業地内には、約 1,100 m<sup>2</sup> の未調査地があり、今後、当地域の変遷を把握するために発掘調査による正確な記録をおこなっていく必要がある。

## 63. 新方遺跡 丁の坪地点 第6次調査

### 1. はじめに

新方遺跡は、明石川流域の弥生時代中期の拠点集落の遺跡として著名であり、1982年に調査された丁の坪第II地点では弥生中期・大日地点では古墳時代後期の玉造工房址が発見され注目された。奈良時代から中世にかけても集落の存続が認められ、中世では神出古窯址群から搬入された瓦が出土する事で知られている。

今回の調査地は丁の坪第II地点の北方約100mに位置し、1994年に集合住宅の建設が計画され建物基礎部分の調査（第5次調査）が行われたが、阪神・淡路大震災にともない設計変更が行われ全面調査となった。調査地は標高10m前後の沖積地上に位置する。



fig. 536  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 第1遺構面

調査の結果5面の遺構面が確認でき、西側には天井川と思われる旧河道が検出できた。溝状遺構を2条ずつ検出した。その他、ピットを数基が検出できた。この遺構面の直上から12世紀から13世紀の土器が出土しており、その直後の時期と予想される。

#### S D101

調査区の北側を南北に走る溝条遺構である。幅は60cmから1mほどで、調査区の東の端に橋状の膨らみがある。埋土にシルト質層やラミナ状に堆積も確認できるので、往時は水が流れている事が予想される。水田等に関係する灌漑施設であろう。

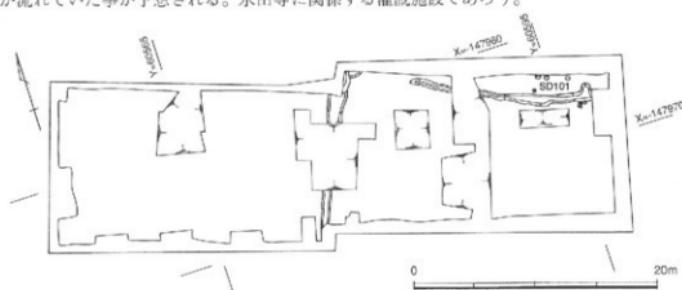


fig. 537  
第1遺構面  
平面図



**第2遺構面** 第1遺構面の10cmほど下層に確認できた遺構面である。調査区の北側を南北に走る溝状遺構と中央を南北に走る浅い落ち込み及び土坑が確認できた。

**S D105** S D101の直下で検出できた溝状遺構である。土層断面で掘り直しの痕跡が認められ、一度埋没した後に掘り直されて、S D101となったようである。遺構に伴うような遺物はみられなかったが、S D101との時期差はそれほど大きくないと考えられる。

**S K103** 東西80cm、南北55cmの歪な長方形の土坑である。時期を決定づけるような遺物は出土しなかったが、銅製の円盤形の遺物が出土している。

**第3遺構面** 第2遺構面から約30cm下のシルト質細砂層で確認できた遺構面である。2間×2間の掘立柱建物1棟の他、ピット、土坑が数基確認できた。

**S B106** 2間×2間の総柱の掘立柱建物である。磁北にはほぼ並行に建てられており、柱間は1間約1.5mから1.7mで桁行は東西約3.2m、南北約3mである。柱穴からは弥生土器が数点出土しているが、遺構が弥生時代の包含層にまで達しており、時期を決定するものではない。

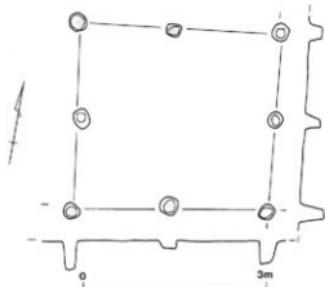


fig. 539 掘立柱建物 SB106 平面・断面図



fig. 540 第1遺構面（中世）全景



fig. 541 第3遺構面 掘立柱建物 SB106

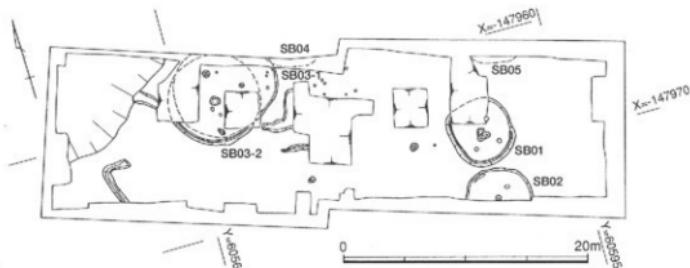


fig. 542  
第4遺構面 平面図

第4遺構面 弥生時代中期の竪穴住居3棟及び、ピット数十基、土坑数基が確認できた。また、調査区北側壁面には住居址と思われる落ち込みが2基が確認できた。

**SB01** 東西約5.2m、南北約5.6mのやや歪な円形の竪穴住居である。中央土坑1基が検出されているが、柱穴は平成6年度調査の第5次調査において検出された東北側の1基しか確認できなかった。周壁溝は東側には存在しない。遺物は第ⅢからⅣ様式の高杯等の弥生土器が出土している。また、炭化材が床面及び床面全面に張り付いた状態で検出できており、焼失住居と考えられる。

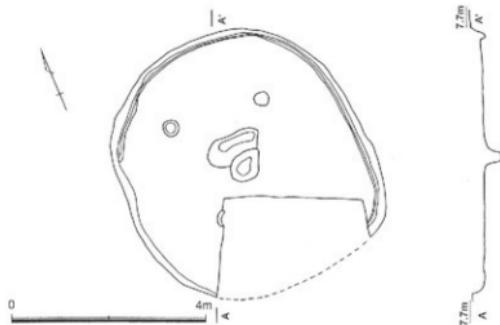


fig. 543  
第4遺構面 SB01 平面・断面図



fig. 544  
第4遺構面 SB01

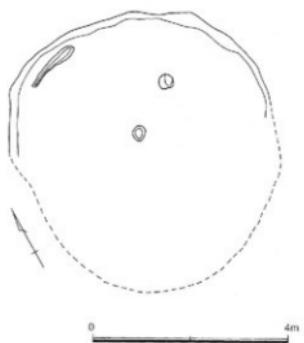


fig. 545 SB02 平面図

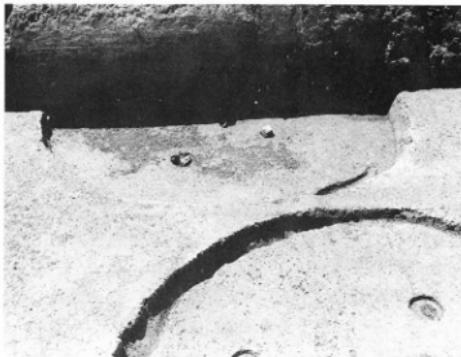


fig. 546 SB02

#### S B02

今回の調査では、この住居址のおよそ1/2ほどを調査したものと思われるが、第5次調査で南側を部分的に調査しており、それと併せて考えると、東西約5.4m、南北約5.8mの楕円形になるようである。中央土坑は今回、第5次調査地においても検出できていない。周壁溝は、今回の調査では北側の一部分にのみしか検出できなかつたが、第5次調査部分では全て確認できているので、東側で途切れると考えられる。

柱穴は第5次調査時も、今回の調査においても検出できなかつたが、北東側に土器片が多く出土したビットがあり柱穴の一つとなるかもしれない。遺物は第ⅢからⅣ様式の弥生土器の他、石器類が数点出土している。

なお、この住居址でも床面及び壁面の全體に炭化材が検出されたおり、S B01と同様に焼失住居であると思われる。



fig. 547  
第4造構面全景

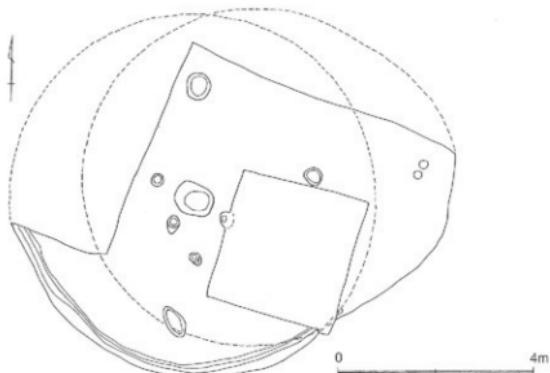


fig. 548 SB03 平面図



fig. 549 SB03

**S B03-1** 東西約7.8m、南北約7mの倒卵形をなし、中央土坑は検出できなかつたが、5次調査時のトレンチ内にあった可能性もある。いくつかピットが検出できたが、どれも住居址に伴うものではないようである。周壁溝は北側の一部分のみ確認できたが、今回の調査では壁面の1/4ほどしか確認できていないので、東側で途切れること以外はわからない。

**S B03-2** 直径約7.6mのほぼ正円の堅穴住居址と思われ、中央土坑1基と柱穴と思われるピット2本が検出できた。周壁溝は壁面が検出できた範囲で全て見られたが、東側では壁面があつたと予想される部分でも全く検出できていない。床面には炭化材が全面に検出でき、S B 01、02と同様に焼失住居と考えられる。

なお、S B03の土層断面から見て S B03-1 より S B03-2 の方が新しいと判断でき、S B03出土の扁平両刃石斧は、出土位置、層序から S B03-2 出土と考えられる。

S B04・05 調査区北側壁面で確認できた住居址状の落ち込みである。調査区内にはごく一部しか入っておらず、平面による検出はできなかった。S B04、S B05ともに弥生土器を出土しており弥生時代の竪穴住居と思われるが、詳細は不明である。

第5遺構面 挖立柱建物1棟と溝状の遺構が数点及びピット、土坑が数基確認できた。

S P 113~116 調査区の東側で検出できた1間×1間の掘立柱建物である。当初、個別のピットとして調査を行ったが、検討の結果、掘立柱建物であると判断した。弥生土器以外の遺物は確認できなかったが、弥生時代の包含層に振り込んでおり時期決定はできない。

S K 124 調査区の南西側、旧河道の縁で確認できた土器廃棄土坑である。南北約1.5m、東西約1.1mで倒卵形をなす。遺構内からは弥生土器片が多量に出土しているが、遺物の検討は行っていないので、現段階では時期ははっきりしない。

3.まとめ 今回の調査では、弥生時代以後の時期に関しては目立った成果は得られなかつたが、生時代に関しては限られた面積の中で4棟以上の住居址が確認でき、丁の坪周辺における弥生時代の集落のあり方について、一資料を提示できると思われる。



fig. 550 第5遺構面



fig. 551 第5遺構面 SK124



fig. 552 出土石器



fig. 553 出土弥生土器

## しんぱうとうほう 64. 新方遺跡 東方地点 第5次調査

### 1. はじめに

新方遺跡東方地点は、明石川と伊川の合流する地点の北東に位置し、新方遺跡の中にあつてはその南端にあたる。これまでの調査は、昭和59年度に都市計画道路玉津鳥羽線築造に関連する3次の調査が今回の調査地のすぐ北側で実施されている。また、この玉津鳥羽線の北側の民間の事業所新築の際に第4次調査が平成2年度に実施されている。

これまでの玉津鳥羽線関連の調査では、南に流れる最大幅15m、深さ1.2mの弥生時代前期～中期を主体とする遺物を多量に含む河道が調査されている。しかし、集落に関連するような遺構は確認されておらず、遺跡の南端にあたることからも、集落の周辺にあたる地点ではないかと推定されていた。

今回の調査地は、この第3次調査地の南に接する地点であり、調査された弥生時代の河道の南側部分が出土することが予測されていた。調査は、民間の賃貸住宅の建設に伴うもので、工事により遺構が影響を受ける範囲に限定して発掘調査を実施することになった。

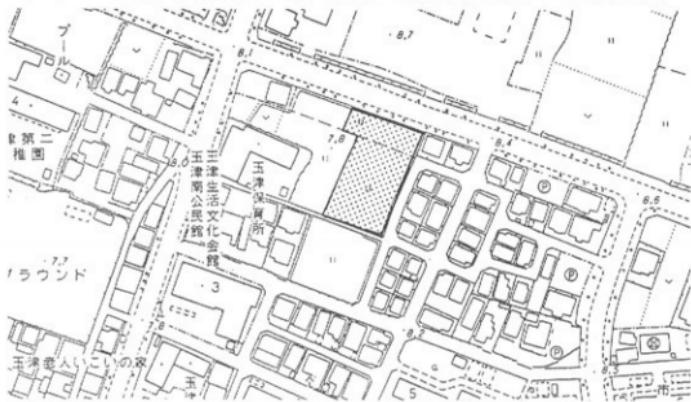


fig. 554  
調査地位図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 基本層序

調査地はこれまで水田として利用されていたため、市街地の中での調査のような攪乱もなく、層序に大きな亂れも認められなかった。層序としては、第1層 ( $T. P=7.3m$ ) が水田耕作土、第2層 ( $T. P=7.0m$ ) が水田床土、第3層 ( $T. P=7.3\sim 6.8m$ ) が遺物包含層（弥生時代の遺物包含層・黒色砂質土）となり、遺構面 ( $T. P=6.6\sim 6.8m$ ) へいたる。ただし、この第3層は地形が南へ緩やかに傾斜していることや、部分的な削平を受けおり確認出来ない部分（主に調査地北側）もあった。

#### 検出遺構

今回の調査では、これまでに確認されていた河道の他に、堅穴住居2棟（弥生時代中期・終末期）土坑35基（弥生時代中期・終末期）、溝状遺構8条（弥生時代後期～終末段階）、性格不明遺構（弥生時代終末段階）3基、ピット85個などが検出された。

- 竪穴住居** 東側の半分近くが調査されたのみであるため規模については明確ではないが、直径約8m程度の円形の竪穴住居になるものと推定される。深さは15cmで相当の削平を受けている。内部には周壁溝ではなく、ビットは15個確認されたが壁際の3個が比較的しっかりとおり柱穴と考えられる。これから復元すれば、7~8個の主柱穴で構成されていたものと推定される。遺物の出土が少なく、時期を決めうる資料も少ないが、出土した遺物の外面にはタタキ目を残す臺片が含まれることから、弥生時代終末ころのものと考えられる。また、この住居内からも碧玉の剝片が1点出土している。
- S B01** 東半分が調査区外にあるが、直径約4mの不整円形の住居と推定される。深さ10cmで、S B01同様に削平が著しいことを物語っている。周壁溝ではなく、ビットは2個が確認されているが、後に掘り込まれた土坑SK29があるため内部構造については不明確である。土器の出土は少なく時期を決めがたいが、埋土からは多量のサヌカイトのチップが出土していることから、弥生時代中期の住居の可能性が高いと考えられる。



fig. 555 調査区全景



fig. 556 竪穴住居 SB01

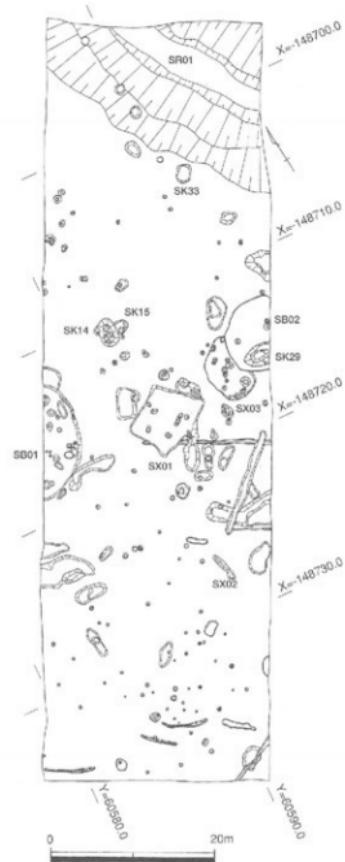


fig. 557 調査区遺構平面図

性格不明遺構 長さ1.9m、幅35cm、深さ15cmの溝状の土坑で、弥生時代後期終末の土器が多量に据え

S X01 (捨て?) られていたものである。遺構の最下部と周辺部に若干の土が認められた他は、遺構の中にはほとんど土器で埋められていた。祭祀的な意味合いも考慮する必要があろう。

S X02 一辺3~4mの不方形部に最大幅1.0m、2.5mの舌状の突出部を持つものである。深さは10cm前後である。方形部にはビットが4個確認されたことから、堅穴住居の可能性も考えられる。舌状の突出部からは弥生時代後期終末の土器がまとまって出土している。

S X03 堅穴住居 S B02に一部が切り込まれているが、長径4.0m、短径2.5m、深さ10cm前後の浅い楕円形の落ち込みである。この床面からは14個のビットが検出されている。

土坑 土坑は総計35基ある。時期を決めうる資料の出土しているものは少なくが、少量出土する遺物から判断するかぎりでは弥生時代後期終末段階のものである。

弥生時代中期段階の確実な土坑はS K14・S K15とS K33である。S K14は、長径1.7m、短径1.1m、深さ30cmの楕円形土坑である。S K15は長径1.0m、短径80cm、深さ30cmのやや小型の楕円形土坑になる。この2基の土坑からは土器は小片が出土しているのみであるが、埋土から多量のサヌカイトチップや剥片が出土しており、このことから弥生時代中期の遺構と判断したものである。S K33は、長径1.1m、短径80cm、深さ10cmの楕円形土坑である。埋土から弥生時代中期前半（第Ⅲ様式前半）の壺が出土している。



fig. 558 堅穴住居 SB02・SX03



fig. 559 SX02

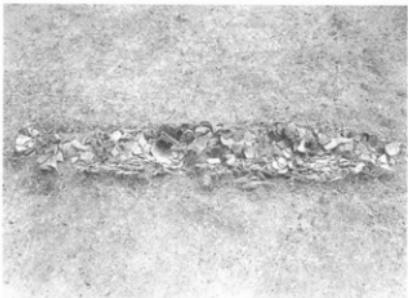


fig. 560 SX01 上層遺物出土状況



fig. 561 SX01 下層遺物出土状況



fig. 562 調査区北半部 河道 SR01



fig. 563 河道 SR01 木製品（広鉗）出土状況

河道 S R01 北側の肩部が未確認である。幅10m以上で深さは1.8mを測る。第3次調査の河道1に続くものである。ほぼ北から南へ流れているが、この付近で東へややカーブするような形をとる可能性がある。埋土は上層・中層・下層に区分することができる。上層には奈良時代の須恵器片が出土することから、この河道の最終堆積は奈良時代であったものと考えられる。この堆積土には、シルト質の強い土層の堆積が認められることから、水が溜まるような状況があったのではないかと推定される。中層には弥生時代終末段階（庄内式）～古墳時代前期の遺物がまとまって出土している。中層段階も堆積状況から比較的の滯水に近い状況にあったのではないかと推定される。下層にはこれまで確認してきた弥生時代中期を主体とする遺物が出土している。弥生時代中期前半（第II様式）の完形に近い土器などが出土することはほぼ同様の成果であった。この中には紀伊型甕と呼称される壺なども含まれている。また、砂層の中からは、木製品が少量出土している。臼片や広鉗（エブリ？）、加工痕のある木片などがある。注目されるものでは玉類の材料に使用されたと考えられる碧玉の剥片が数点出土している。石器類では石包丁なども出土している。

そして、この弥生時代中期の河道の最下層付近では、弥生時代前期後半の遺物が所々出土する部分がある。中期段階の流水に伴い前期段階の堆積物が削られ、削り残された部分に前期の遺物が遺存していたものと考えられる。

### 3.まとめ

これまで実施された新方遺跡東方地点の調査では、集落に關係するような遺構は顕著に確認されてはおらず、比較的の遺構の希薄な地点ではないかと考えられてきた。しかし、今回、堅穴住居をはじめとして多くの遺構が確認されたことにより、この地域にも集落域が拡がっていることが確認された。新方遺跡は現在この付近が遺跡の南端とされているが、この南側や東側へも遺跡の拡がりがあるものと考えられ、新方遺跡の遺跡範囲が更に拡がることを明らかにする結果となった。また、今回確認された弥生時代後期後半の遺構や遺物は、新方遺跡の中にあっては、比較的の調査例が少なく、重要な調査成果である。

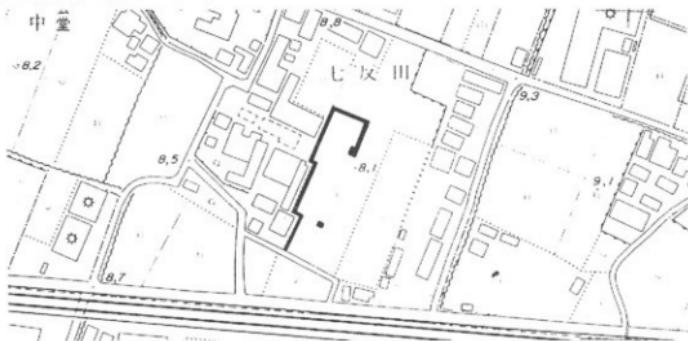
また、これまでの調査で確認されていた河道からは、これまで同様に弥生時代中期前半を主体とする遺物が出土しているが、今回の調査ではそれ以上に弥生時代終末から古墳時代前期の遺物が出土しており、この河道の南側で検出された堅穴住居などとともに、弥生時代後期終末の集落の様子の一部をうかがう手がかりとなるものである。

## しんぱう しもたん だ 65. 新方遺跡 七反田地点 第2次調査

### 1. はじめに

七反田地区ではこれまでに昭和52年度の調査で弥生時代中期の土器、奈良・平安時代の木器類が出土している。今回は集合住宅建設に伴う擁壁工事によるもので、工事により文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を実施した。調査地は明石川左岸の氾濫原に位置し、標高は約9mである。

fig. 564  
調査地位置図  
1:2,500



### 2. 調査の概要

調査地の層序 (fig. 566) は1層～6層が旧耕土及び床土で、7層は一定の期間湿地状の様相を呈し、弥生土器・中世の土師器・須恵器を含む。8層～17層も7層と同様であると思われ、黒灰色・黒褐色粘土・シルトによる堆積である。13、18～22層は青灰色細砂・シルトによる堆積で13層直上から古墳時代の土師器・奈良時代の須恵器が出土している。調査地の北西側では、13層の淡黒灰褐色砂質シルト層から古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器が、15層の黒灰色シルト質細砂層から弥生時代前期後半の壺、中期初頭の甕等が出土しているがいずれも遺構の存在を確認することはできなかった。

以上の様な状況から、調査地付近は弥生時代～古墳時代には自然流路で、以後中～近世期にかけては湿地であった可能性が考えられる。これらに含まれる遺物も流れ込みによるものと考えられるが、調査地の近隣では遺構の存在が確認されていることや、今回出土した弥生時代前期後半の壺は底部を穿孔しており、供獻土器であると考えられることから、付近に遺構が存在する可能性は高いものと思われる。

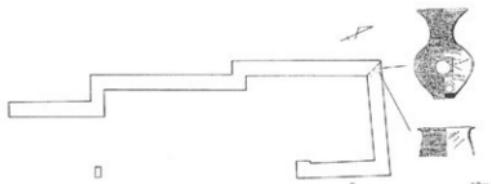


fig. 565 調査区平面図

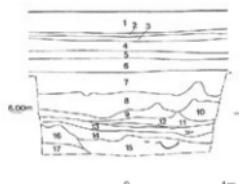


fig. 566 調査区断面図

### 3. まとめ

今回の調査では遺構の確認はできなかったが、弥生時代前期後半～中期初頭、古墳時代後期～飛鳥時代、中近世の遺物を確認できた。特に弥生時代前期の資料はこれまでの調査でも例の少ないものであり、新方遺跡の成立を考える上でも貴重な資料である。また、底部を穿孔しており、墓址に伴う供獻土器と考えられる。このことは、近隣の村中地区から昭和59年度の調査で弥生時代中期前半頃の円形周溝墓が確認されていることから、付近一帯に墓域が存在する可能性も考えられる。



fig. 567 第15層出土遺物と調査区堆積状況



fig. 568 第15層出土遺物

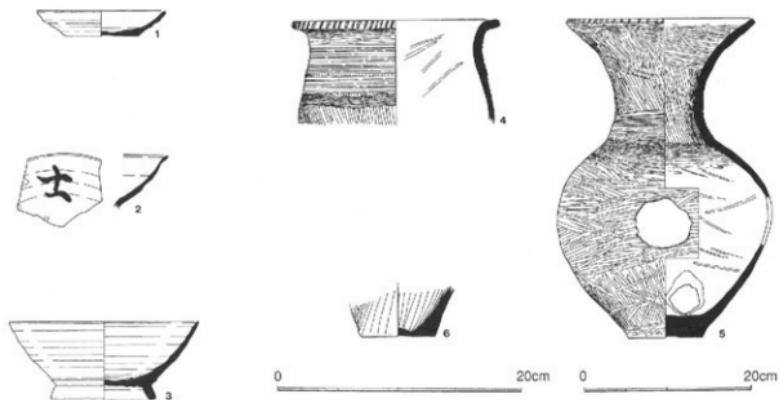


fig. 569 出土遺物実測図

(1・2、第7層 3、第4～6層 4・5、第15層 6、第13層)  
 (1、土器 2～3、須恵器 4～6、弥生土器)

## 66. 新方遺跡 西方地点 第2次調査

## 1. はじめに

新方遺跡は、山陽新幹線建設に伴う調査によって明らかになった遺跡で、昭和45年度の調査では弥生時代中期初頭から鎌倉時代の遺物が多量に出土し注目された。この後、数次にわたり発掘調査が実施され、その度ごとに新方遺跡が大規模で重要な遺跡であることが確認されている。

西方地点は、新方遺跡の南西端に位置しており現在の明石川に近く、当地点のすぐ西側においては、同川の氾濫原が存在する。平成5年度の試掘調査により、遺跡の広がりが確認され、平成7年度に第1次調査が実施された。調査の結果、平安時代から鎌倉時代の握立柱建物が検出され、当時の流路の一端が確認された。今回の調査は上池上地区画整理事業に伴うもので、工事により文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を実施することになった。なお、便宜上調査区を1区から6区まで分け、本年度分は3区～6区である。



fig. 570  
調查地位圖  
1:2,500

## 2. 調査の概要

調査地は、明石川の左岸の氾濫原に位置し、標高は約6mである。

基本土壤

調査地の基本土層は、1層耕土、2層床上、3層黄灰色砂質土(旧耕土)、4層黄灰色砂質土(旧耕土)、5層暗灰色砂質シルト、6层茶色シルトである。

このうち4層の旧耕土層に遺物が含まれており、5層上面で第1遺構面を、6層上面で第2遺構面を検出した。

- 第1造構面** 第1造構面では掘立柱建物6棟の他、溝、土坑、ピットを多數検出した。
- 掘立柱建物**
- S B01 梁行5間、梁間3間の東西に長い総柱建物で、柱間の距離は2.3mである。北側2間分と東側1間分は、柱間距離が半分になっており、この部分は縦東であると考えられる。柱穴底には、礎板が敷かれているものが多く、柱根が遺存しているものもあった。建物の西側を除く三方向には雨落溝が巡っている。
  - S B02 梁行7間、梁間2間の東西に長い総柱建物で、各柱間に浅い柱穴があり束柱を持つ構造と考えられる。柱間距離は2.3mで、建物本体の柱穴の規模では径40~60cm、深さは50~60cm、束柱は径30~40cmの規模で、深さは20~30cmである。根石や礎板、柱根が遺存するものがある。雨落溝もしくは敷地を区画するためと考えられる溝が建物の周囲に巡っている。
  - S B03 4区西端で検出した総柱の建物で、梁行3間、梁間3間のはば正方形の建物になる。柱穴は径60~70cmの規模で、深さは50~70cmある。柱間の距離は約2.3mである。

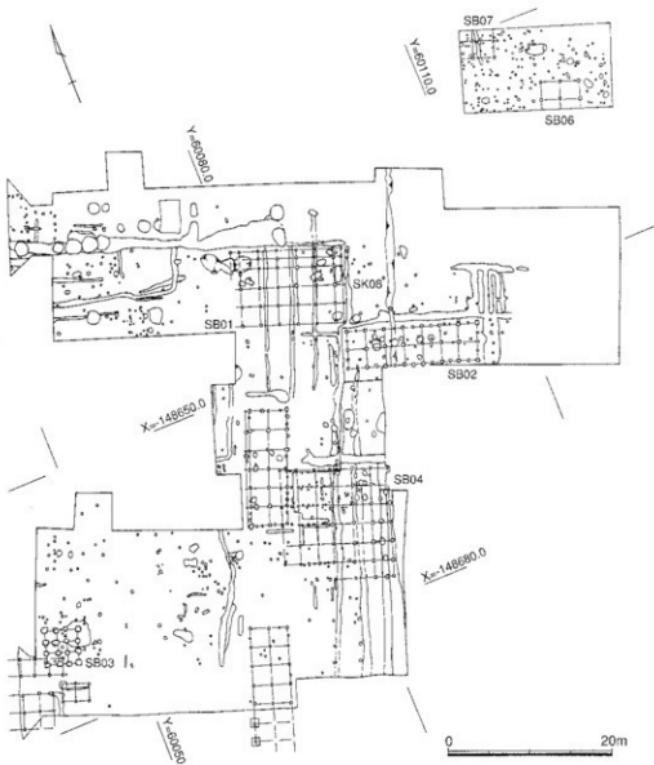


fig. 571 第1造構面 平面図(平成7年度調査地と合成)

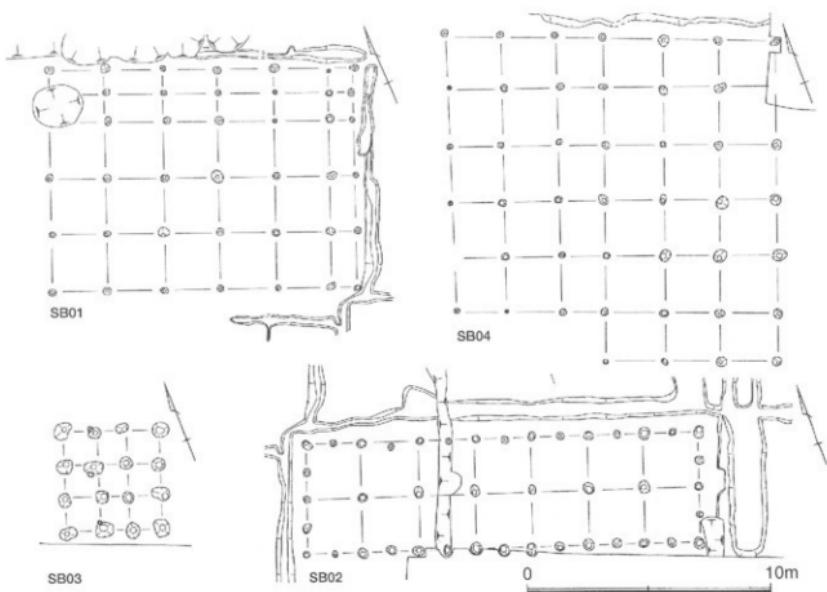


fig. 572 SB01・02・03・04 平面図



fig. 573 捩立柱建物 SB01・02



fig. 574 捩立柱建物 SB02

- 掘立柱建物** 柱行6間、梁間5間の縦柱建物で、南東隅に1間分の張出しが付く。柱間距離は約2.3mである。  
 (SB04) 柱穴は径30~60cmの規模で、深さは30~60cmある。柱穴の底には根石や礎板が遺存しているものもあり、柱根が遺存しているものもあった。
- 掘立柱建物** 東西2間、南北2間以上の縦柱建物で、調査区外に延びる。柱間の距離は、東西2.4m、南北2mである。柱穴は径30~40cmの規模で、深さは30~40cmである。
- 掘立柱建物** 東西2間以上、南北2間以上の縦柱建物で、調査区外に延びる。柱間の距離は東西2.5m、南北2mである。柱穴は径30~40cmの規模で、深さは30~40cmである。
- 土坑** 東西1.1m、南北0.8m、深さ0.3mの梢円形の土坑である。須恵器、土師器の他青磁合子  
 (SK07) が1点出土している。墓の可能性が考えられが、断定できるようなものはなかった。
- 土坑** 東西0.8m、南北1.8m、深さ0.2mの隅丸長方形の土坑で、埋土中から須恵器、土師器の  
 (SK08) 完形の皿、小皿がまとまって出土している。
- ピット** 建物としてまとまらないピットが多数ある。この中には根石や、礎板が遺存しているものや、小皿を取り囲むように須恵器の鉢の破片を立てかけて配置している状態のピットが検出されている。おそらく地鎮遺構であろうと推測される。

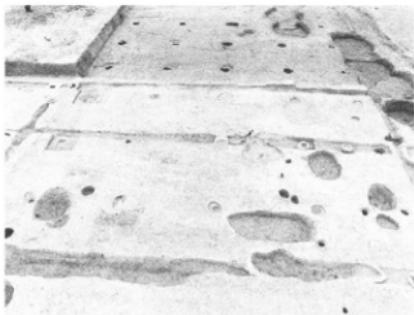


fig. 575 掘立柱建物 SB01

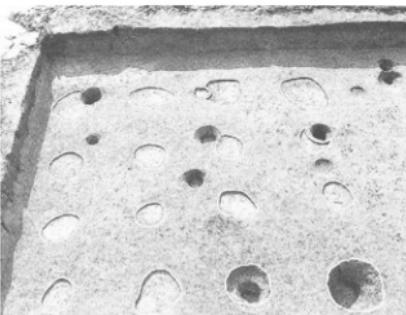


fig. 576 掘立柱建物 SB03



fig. 577 土坑 SK08 遺物出土状況



fig. 577 ピット内遺物出土状況

- 第2遺構面** 第2遺構面では掘立柱建物2棟の他、耕作に伴う鋤溝を多数検出した。
- 掘立柱建物（SB201）** 4区南端で検出した柱の建物で、桁行3間、梁間3間のほぼ正方形の建物になる。柱穴は60~70cmの方形で、深さは50~70cmある。柱間の距離は1.3~1.4mである。
- 掘立柱建物** 4区北端で検出した建物である。調査区外に延びているため規模は不明であるが、東西3間、南北2間以上の建物である。柱穴は短辺60cm、長辺1m程度の長方形で、深さは50~70cmである。柱間の距離は東西1.9m、南北2.5mである。柱根が良好に遺存しているものもあった。
- 鋤溝** 幅30~50cm、深さ10~20cmの溝で、調査区の各所から検出した。溝の方向は調査区周辺の条里地割りの方向と概ね一致している。
- 出土遺物** 遺物は、殆ど出土していないので、遺構の時期を決定することは困難であるが、第1次調査で同一面から平安時代の遺物が出土しているのでおそらく平安時代であろう。



Fig. 579 第2遺構面平面図

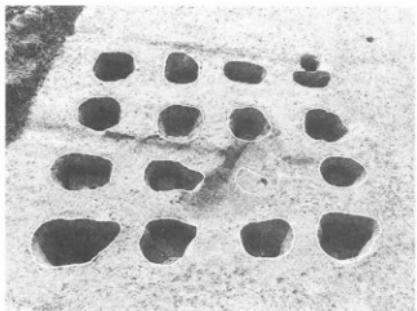


Fig. 580 掘立柱建物 SB201

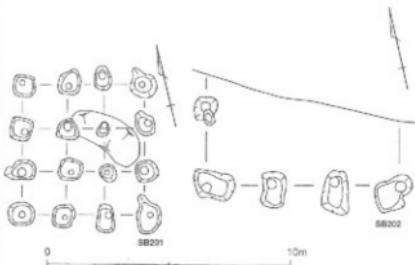


Fig. 581 SB201・202 平面図

### 3.まとめ

当該地は、新方遺跡の中では南端部に位置しており、遺構の存在が希薄な場所であると考えられていた。しかしながら調査の結果、鎌倉時代の掘立柱建物が6棟検出され、1次調査と合わせると13棟の掘立柱建物が確認されたことになる。中でも今回検出した掘立柱建物（SB01・04）は、規模が大きく屋敷の母屋的な建物であると推定される。また、SB02は細長い建物で、厩の可能性が考えられる。SB03は倉庫と考えられる。SB06・07は一部しか検出していないので建物の性格は不明である。

第2遺構面でも掘立柱建物を2棟検出したが、SB201は倉庫と考えられる。SB202は一部しか検出していないので建物の性格は不明である。これらのことからこの場所の土地利用の変遷を追っていくと、平安時代には、一部分に集落を構成する建物が立ち始めたものの、大部分は耕作地として利用されていた。しかし鎌倉時代になると耕作地は宅地となり大規模な掘立柱建物が建てられるようになる。集落が拡大したのか、それとも他の場所から移動してきたのかは、今後の周辺の調査によって明らかになるであろう。



Fig. 582  
調査地企画（北上空から）

## 67. 出合遺跡 第35次調査

### 1. はじめに

出合遺跡は、明石川の下流域の右岸、標高12~15mの沖積地と西側の台地縁辺に位置している。これまでに34次にわたり調査が実施され、台地上では帆立貝式古墳や奈良時代の井戸が検出され、沖積地では、弥生時代から中世までの遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は、古墳時代中期の河道が検出され、須恵器が多量に投棄された状態で出土した第31次調査地の北側、道路の下水道管敷設予定地内で実施した。



fig. 583  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 第1遺構面

盛土直下に中世の遺物を含む暗灰茶褐色砂質土が堆積している。A・B区の暗灰茶褐色砂質土下では水田畦畔を検出した。C区では、暗灰茶褐色砂質土が、南東部で比較的薄く堆積し、北西部では分厚く堆積していた。このC区北西部で柱列1条を検出した。

#### 水田畦畔

A・B区の第1遺構面を南北に斜めに横切る水田畦畔である。幅1.2m前後、高さ20~30cm前後で断面の形は台形である。この水田畦畔と平行して、東側に幅60cm前後、深さ5cm前後の砂を覆上とする溝を検出した。畦畔の方位は北24° 東を探っている。

#### 柱 列

C区の第1遺構面北西端で検出した。暗灰茶褐色砂質土が凹地に落ち込み、この落ち込みの下面で6ヶ所の柱穴を検出した。柱穴の間隔は1.5m等間隔で南北に並ぶ。柱穴の規模は、径60cm前後の円形で、掘形の深さは15cm前後と浅い。掘形内の埋土内からは陶器片・土師器片・須恵器片が出土した。

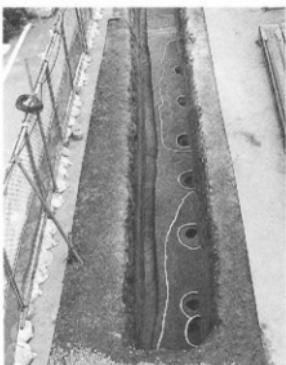


fig. 584 第1遺構面 柱列

**第2遺構面** A・B区では、水田に伴う整地層、C区では、掘立柱建物を伴う整地層の下に弥生時代～鎌倉時代の遺物を含む暗灰色粘質土が検出された。暗灰色粘質土の下層は堅い緑灰色砂質土の地山となる。この地山を穿って、A区では、上層と平行する溝を検出した。C区では、調査区南部で河道1ヶ所を検出した。

**溝** A区の第2遺構面で検出した上層の水田畦畔に平行する溝は、幅70cm前後、深さ2～5cmの断面U字状である。溝の覆土からは、古墳時代～鎌倉時代の須恵器片・土師器片が出土している。

**河道** C区の第2遺構面の南部で検出した。幅12m、深さ70cmを計測する自然河道である。河道の北岸は急激に落ち込み、南岸は緩やかに落ち込んでいる。河道内の堆積層上層で弥生上器が出土した。

**3.まとめ** 調査地は、台地と沖積地の縁辺にあたり、明石川に近い北東部は鎌倉時代以降農地として利用されたと推定される。

調査区の南西部では比較的遺物包含層が残り、柱列が検出され、居住区域として利用されたと考えられる。しかしながら、鎌倉時代以前の遺構面である第2遺構面では生活痕跡は残存せず、弥生時代に埋没した河道や遺物が散在するにすぎない。

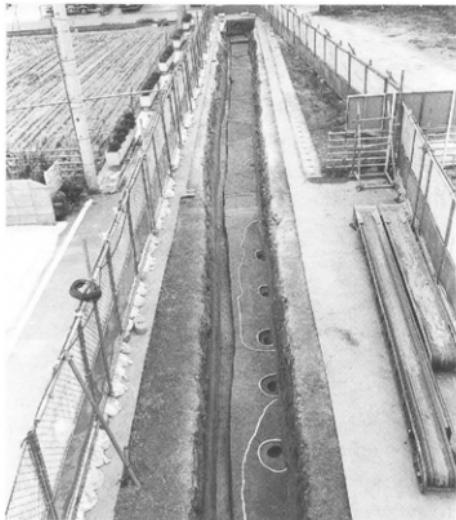


fig. 585 第1遺構面 全景

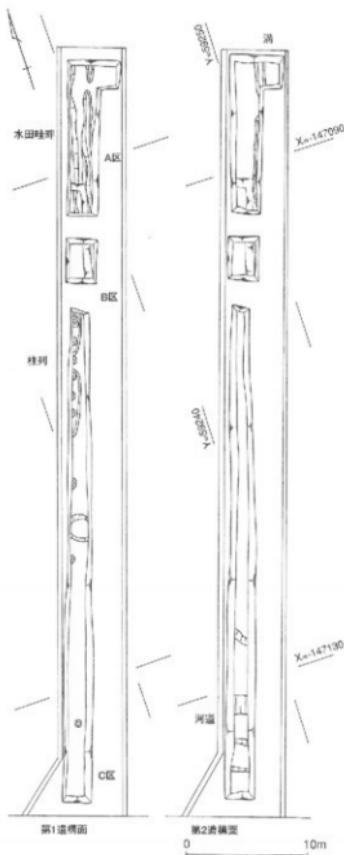


fig. 586 遺構平面図

### III. 平成8年度の通常事業に伴う発掘調査

#### 1. 本庄町遺跡 第5次調査

##### 1. はじめに

本庄町遺跡でのこれまでの調査は、昭和59年（1984）に財團法人古代学協会・平安博物館が調査した第1次調査で、弥生時代前期の水田、古墳時代後期の獸足跡等が検出されている。その後昭和61年（1986）の第2次調査では兵庫県教育委員会の調査で縄文から近世にかけての5面の遺構面が確認された。主な遺構は縄文時代の貯蔵穴、弥生時代後期以降の水田、中世の水田である。平成4年（1992）の第3次調査は神戸市教育委員会が実施したもので、中世の水田、木製品が出土している。また同じ年に高山歴史学研究所によって第4次調査が実施され、その時の調査では平安時代の建物、古墳時代の溝、縄文時代後期の用途不明遺構が検出されている。

今回の調査は、神戸市立東灘のぞみ幼稚園（旧深江幼稚園）の園舎増築に伴う調査で、平成4年に実施した第3次調査地に隣接している。



fig. 587  
調査地位置図  
1:2,500

##### 2. 調査の概要

調査区の基本層序は、大きく分類すると上層から順に盛上・攪乱層、近世以降の畑、洪水砂となり、地表下約1.3mで中世水田面（第1遺構面）、さらに厚さ40cm～1.4mの湿地状堆積層の木製品等を含む遺物包含層があり、地表下約1.7m～2.5mで基盤層（第2遺構面）となる。

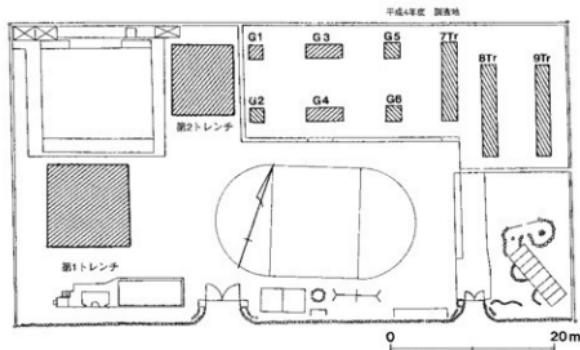


fig. 588 調査区平面図

#### 第1トレンチ

調査は遺物の混入する洪水砂下層までをバックホーで掘削し、その後人力によって中世水田面と思われる遺構面を検出した。水田畦畔は無かったが獸足跡を検出した。積極的に水田遺構として認められるものは無いが、これまでの周辺の調査成果と合わせて考えるならば、水田として利用されていたと考えられる。

#### 第2遺構面

中世水田土壤を掘削すると、淡黒色シルト～砂質シルト層の堆積から板状の割材や角材、丸材、部材などの木製品が出土した。これらの木製品はその多くが、全面あるいは一部が炭化している。木製品は34点出土した。

木製品以外の遺物は須恵器、土師器、弥生土器が極わずか出土している。この遺物包含層や下層の黒色シルト層は湿地の堆積物と考えられるが、調査区の南側から北西側にかけて、地形が低くなっていく分、堆積は厚みを増している。

基盤層となる灰褐色～灰白色の極細砂～中砂層は調査区の北西部で下がっている。遺構精査を試みたが遺構は存在しなかった。

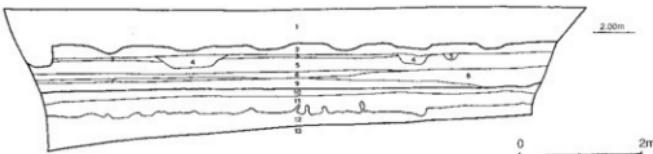


fig. 589 第1トレンチ北壁 断面図

- |             |                                   |
|-------------|-----------------------------------|
| 1. 盛土・複乱    | 8. 灰褐色極細砂                         |
| 2. 暗灰色砂質シルト | 9. 淡青灰色砂質シルト                      |
| 3. 淡灰色砂質シルト | 10. 暗灰褐色砂質シルト～極細砂<br>粗砂混入（中世水田土壠） |
| 4. 暗灰色砂質シルト | 11. 淡黒色シルト～砂質シルト                  |
| 5. 淡褐色砂質細砂  | 12. 黒色シルト（木製品を含む）                 |
| 6. 淡灰色砂質シルト | 13. 灰褐色～灰白色 積細砂～中砂                |
| 7. 明黄色極細砂   |                                   |



fig. 590 第2トレンチ 全景



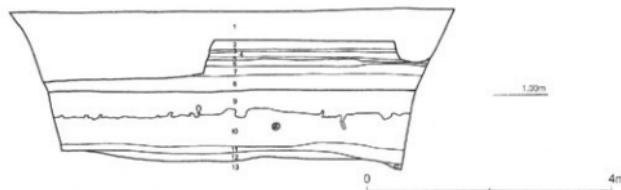
fig. 591 第2トレンチ 木製品出土状況

**第2トレンチ** 第2トレンチは第1トレンチの北東側に位置する調査区で、幼稚園の園舎と園舎の間隙での調査であった。調査区をガス管が横断している為に、その部分の調査は出来なかった。便宜上調査区の東側を1区、西側を2区と呼称した。

**第1構造面** 調査は第1トレンチ同様に、遺物が混入している灰褐色砂質シルト層までをバックホーで掘削した後、人力で中世水田層までを掘削していった。この調査区でも水田畦畔は検出されなかつたが、1区で多くの獸足跡を検出した。中世に水田として利用されていたと考えて良いであろう。

**第2構造面** 中世水田土壤を掘削すると、黒色シルト層の厚い堆積となり、木筒状板材、両端をえぐつてある板材、杭、曲物底板、板状割材などの木製品が出土している。この内、木筒状板材は墨書きは確認出来ないが、その形状が木筒に類似しているものである。木製品は40点出土した。この下層には植物遺体が大量に堆積していた。

遺物包含層を掘削すると、灰白色の極細砂層の基盤層となるが遺構は存在しなかつた。



- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 1. 盛土・擾乱           | 8. 灰褐色砂質シルト 極細砂・細礫混入  |
| 2. 暗灰色砂質シルト (旧耕作土) | 9. 暗灰色シルト (中世水田土壤)    |
| 3. 黄褐色褐色粘細砂        | 上面に獸足跡あり              |
| 4. 淡黄褐色褐色粘細砂       | 10. 黒色シルト (木製品を含む)    |
| 5. 淡黄褐色褐色粘細砂       | 11. 黒色シルト (植物遺体を多く含む) |
| 6. 淡灰褐色褐色粘細砂       | 12. 黒色シルト～灰白色粘細砂      |
| 7. 暗灰褐色褐色粘細砂       | 13. 灰白色粘細砂 (淘汰良い)     |

### 3. まとめ

今回の調査は、第3次調査の成果と同じ結果となったが、第1トレーナーで基盤層が北西側から南側に向かって高くなる傾斜変換点が確認できたことは、当時の地形を復原する上で貴重な資料となるであろう。

兵庫県教育委員会が、今回の調査地点の南側で行った深江北町遺跡の調査地では、レベル的に高位になり、弥生時代や古墳時代の遺構が検出されている。この集落の存在する砂堆が北側に低くなった低地が今回の調査地にあたり、古代から中世にかけて植物の群生する湿地が拓がっていたと考えられる。黒色シルト層から出土する木製品は、この湿地に何らかの状況から埋没していたものと思われる。本製品の時期は出土土器がわずかで、細片のため時期を特定することは困難であるが、木簡の形状からも考えて古代のものと考えられる。

その後、洪水砂によって水平となった部分に中世において、水田が拓かれていたと思われる。これが今回の調査での第1遺構面である。

今後、周辺の調査が進めば、さら詳細な地形復原が可能であり、生産遺構以外に木製品を作った人々の集落も発見され得るであろう。

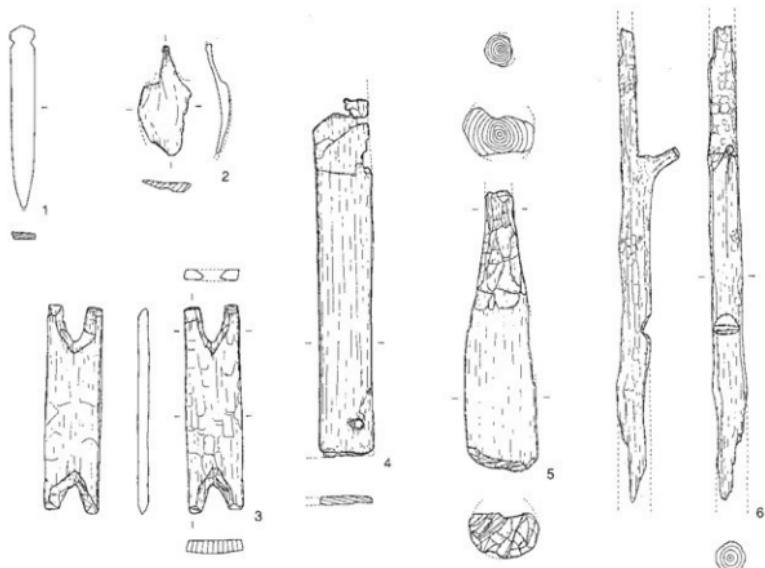


fig. 593 出土木製品実測図  
縮尺 1・2 = 1/2 3・4・5 = 1/4 6 = 1/8

## 2. よしお つくもの 吉尾遺跡・附物遺跡

1. はじめに

吉尾遺跡、附物遺跡は、八多川上流に形成された河岸段丘上に位置する平安時代から近世に至る遺跡である。今回の報告は、圃場整備事業に伴う発掘調査の記録であり、吉尾遺跡から順に報告する。なお、吉尾遺跡は平成7年度からの継続事業である。

吉尾遺跡

吉尾遺跡は吉尾川が八多川に合流する付近に位置する遺跡で、八多川はここから北流した後、道場町で有野川、有馬川、長尾川と合流し、武庫川に流れ込み、大阪湾へと注いでいる。この遺跡は八多川左岸に形成された河岸段丘上に拡がる遺跡と考えられ、これまでに平安時代～江戸時代の集落跡が発見されている。

今回の調査は県営圃場整備事業に伴う調査で、河川の付け替え部分について調査を行った。今回の調査は第3次調査である。



fig. 594  
吉尾遺跡  
調査地位置図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

吉尾遺跡の調査は、平成7年度からの継続調査である。調査地の基本層序は、耕作土、床土、淡灰褐色砂質シルトの旧耕土の下層に中世の遺物包含層をベースとする第1遺構面（標高199.5m前後）が検出された。第1遺構面の基盤層の下層には、黄褐色シルト質細砂の第2遺構面検出面となる。この遺構面は、東側へ緩やかに下がり、調査区中央やや西寄りで検出された溝S-D02を境に中疊、大疊を含む砂礫層となる。

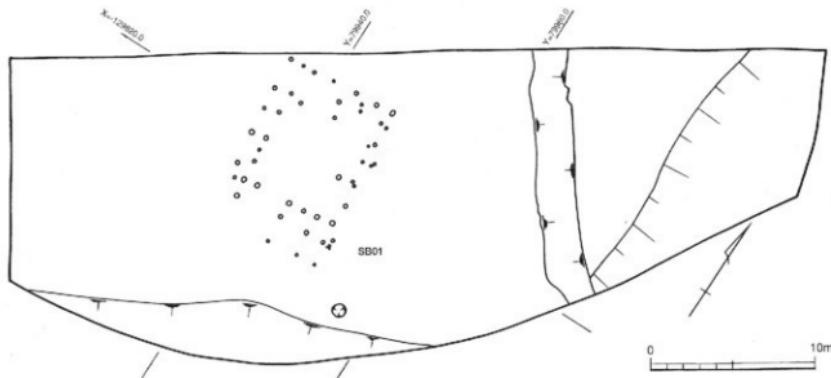


fig. 595 第1塗構面 塗構平面図

**第1塗構面** 中世の遺物包含層を基盤層として、掘立柱建物が1棟とビットを数基検出した。南北5間、東西5間（6.2m）、南北5間（7.6m）南北棟の掘立柱建物である。南北の柱間は、1.3~2.1mで、東西の柱間は0.9~1.6mとばらつきがある。西側には、半間分の庇が付くと思われ、南側には1間半分の小屋を設けていると思われる。南側の柱間の広い部分が出入口であったのではないか。

柱穴S P34からは須恵器の壺片、柱穴S P07からは須恵器の壺片、柱穴S P10では須恵質の平瓦が出土している。柱穴S P15には柱根が残っていたが遺存度は悪かった。また、S B01に付随する柱穴かどうか不明であるが、S P12・13からは礫石が出土している。

掘立柱建物S B01の時期は、柱穴からの出土遺物が細片であるため、時期を判定するのには困難であるが、14世紀に属するであろうと思われる。



fig. 596 掘立柱建物 SB01

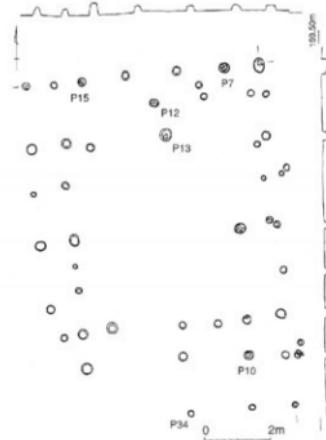


fig. 597 掘立柱建物 SB01 平・断面図

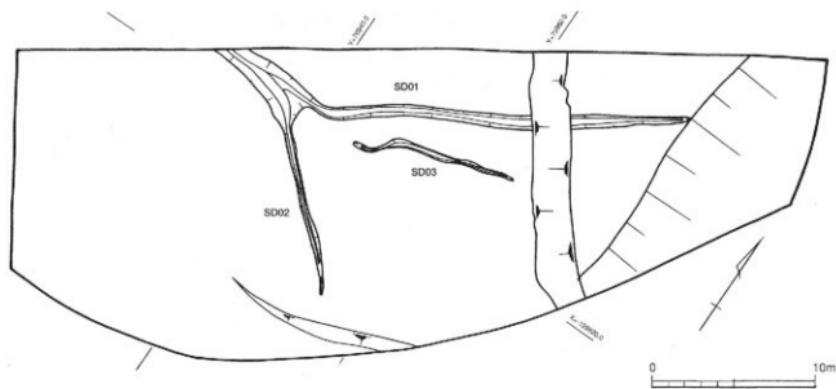


fig. 598 第2遺構面 遺構平面図

**第2遺構面** 第1遺構面のベースとなる明灰褐色砂質シルトの包含層を掘削すると、黄褐色シルト質極細砂の遺構面となる。精査の結果、溝3条を検出した。調査区の東側は緩やかに下がって行き、西側はSD02を境に中疊、大疊を含む砂疊層となる。

**SD01** SD01とSD02は調査区の西から流れている溝で、途中でSD01とSD02の2本に分かれている。SD01は幅80cm内外で深さ15cm～20cmの溝で、埋土は灰褐色砂質シルトである。

SD02との合流点より東側に向かい、地形が下がって行くに従い、溝は消滅する。

**SD02** SD02はSD01との合流点より南側に向かう溝で、幅40cm内外で深さ10cm～15cmである。埋土は灰褐色砂質シルトでSD01と同様である。

SD01とSD02の時期は出土遺物より13世紀と考えられる。

**SD03** SD03はSD01の南側に並行する溝で、幅40cm内外で深さ15cm～20cmである。埋土は茶褐色シルトで、底面は凹凸である。出土遺物が無いため時期は不明である。



fig. 599 第2遺構面 全景

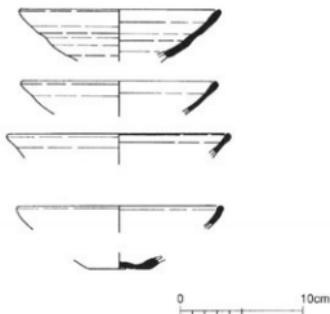


fig. 600 SD02 出土土器実測図

### 附物遺跡

吉尾遺跡の南西1kmに位置する附物遺跡は、附物川が八多川に合流する付近の河岸段丘上に立地する遺跡で、平成2年に八多中学校の管理棟建設に伴い初めて発掘調査され、近世土坑、中世掘立柱建物等が発見されている。今回の調査は第3次調査に当たる。

fig. 601  
附物遺跡  
調査位置図  
1:4,000



附物遺跡の調査は広範囲に渡るため、便宜上北から順にトレンチ番号を付した。各調査トレンチの調査状況の概要は、下記の表のとおりである。

調査区のなかで第3トレンチについては、遺構の密度は高く、3棟の掘立柱建物が検出された。第4・5・6トレンチからもピットが出土したがいずれも散在的で、掘立柱建物としてはまとまらなかった。

トレンチ名	遺構検出状況
第1トレンチ	調査区東側が旧河道で削平され、遺構は存在しなかった。
第2トレンチ	調査区北西端で直径78cm、深さ14cmの土坑を1基検出。
第3トレンチ	A区：掘立柱建物3棟、土坑2基、溝3条、ピット数十基。B区：ピット3基検出。土坑SK01は長径80cm、短径68cm、深さ12cmの楕円形、SK02は長径104cm、短径66cm、深さ34cmの楕円形（13世紀頃）。
第4トレンチ	調査区北端で直径20cm内外、深さ10cm内外のピットを5基検出。
第5トレンチ	土坑2基（14世紀頃）、溝1条（14世紀頃）、ピット2基を検出。
第6トレンチ	ピット1基と幅6m、深さ20cmの落ち込み1基検出。
第7トレンチ	南側から北側に緩やかに落ち込む自然地形を検出。最深部には植物遺体が堆積していた。
第8トレンチ	標高222.70mの調査地内最高部に位置するが、後世の削平か遺構は検出されなかった。
第9トレンチ	直径15~36cm、深さ3~43cmのピット17基を検出。東端の緩やかに落ち込む自然地形の埋土からサヌカイト製の石鎌が1点出土している。

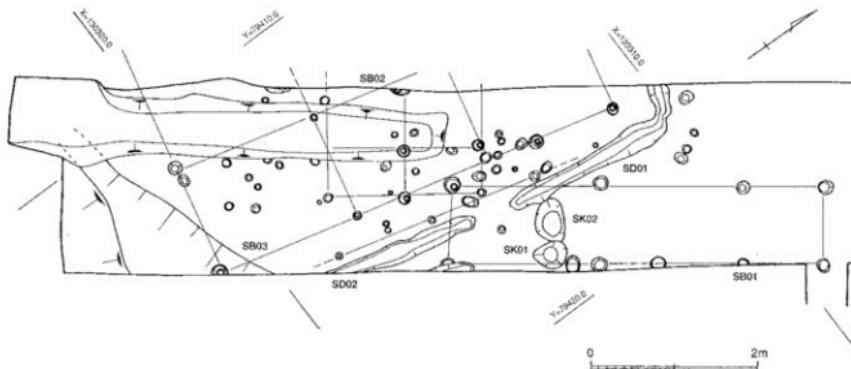


Fig. 602 第3トレンチA区 遺構平面図

第3トレンチ 第3トレンチA区では南半で遺構が集中し、掘立柱建物3棟、土坑2基、溝3条、ピット数十基を検出した。

S B01 S B01は1間（2m）以上×2間（7m）の縦柱の掘立柱建物で、東側に半間の庇が付くと思われる。柱穴の直径は40cm内外で深さは35cm～40cmである。時期は不明である。

S B02 S B02は2間（2.8m）×2間（3.7m）以上の縦柱の掘立柱建物と思われる。建物の方向はS B01と同様である。柱穴の直径は22cm～30cm、深さは9.9cm～48cmであった。柱穴のうち、S P04には柱根が残っていた。S P05からは片口鉢が出土した。出土遺物から13世紀頃の建物と考えられる。

S B03 S B03は1間（2.7m）以上×3間（10.2m）の縦柱の掘立柱建物と思われる。柱穴の直径は22cm～40cm、深さは28.9cm～55cmであった。柱穴のうち、S P02・03には柱根が残っていた。S P02からは壺の口縁が、S P22からは片口鉢が出土している。これらの出土遺物より、14世紀頃の建物と考えられる。

S D01 S D01とS D02はS B03の周囲を巡るように検出された溝で、S B03に属する雨落溝であると思われる。溝の幅は35cm～65cmで深さは10cm。このS D01、S D02とS B03との間にピット列が検出されたが、柵状のもののが存在していたと思われる。

S B01～03の先後関係判断しがたいが、S B02・03の出土遺物から考えて、S B02が先行するものと思われ、S B03の雨落溝と思われるS D02と方向を同じくするS D03が、S B01のピットを切っていることから、S B01はS B03に先行するものと考えられる。さらにS B01とS B03の柱間がほぼ同一であることから、時期差は無いと考えられる。以上のことから推測して、掘立柱建物はS B02→S B01→S B03の順に建てられたと思われる。

ピットは数十基検出されたが、建物を構成しないものの中で、S P01からは片口鉢がほぼ半個体出土している。13世紀のものであろう。また、S P08は残りの良い柱根が出土している。S P20からは瓦器が出土している。S B03の南側は緩やかに下がって行き、削平を受けているため、遺構は検出されなかった。



fig. 603 第3トレンチA区 全景



fig. 604 第3トレンチA区 掘立柱建物・痕

第5トレンチ 第5トレンチから第9トレンチは八多川をさらに300m逆上った地点に位置する。

- S K01 隅丸方形の平面形をし、一部が溝状に延びている。長辺2m以上、短辺105cm、深さ10cmで、長辺の一部に長さ75cmにわたり溝状に飛び出す。時期は14世紀頃と思われる。
- S K02 円形の土坑であると思われるが、調査区外に延びる。土坑の直径は1.7m、深さ40cmで、20cm程の珪化木が出土している。時期不明であるが、SK01と同時期のものであろう。
- S D01 幅70cm内外、深さ20cm内外であった。溝の時期は出土遺物から14世紀頃と思われる。

### 3.まとめ

今回の調査で注目すべきは、附物遺跡の第3トレンチで掘立柱建物が3棟発見されたことであろう。第3トレンチについては、遺構の密度は高く、それが地形的原因なのかどうかは不明であるが、少なくとも、意識的に同一地区に居住し続けていたことは明らかである。13~14世紀の集落構造を知る上でも、今回の調査は貴重な発見であった。

吉尾遺跡の調査区においては、掘立柱建物が1基のみ検出されたが、地形から見るがぎり、調査区の北側にさらに幾つかの掘立柱建物の存在が想定され、昨年度の第2次調査ともあわせ、当該期の集落址を考える上で貴重な発見であった。

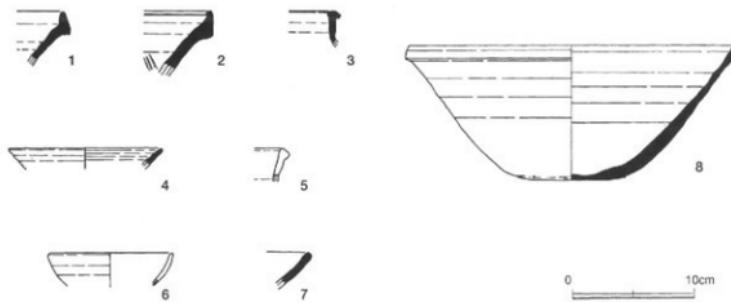


fig. 605 第3トレンチA区 出土土器実測図  
1・6:SB01 2・3:SB03 4:SP08  
5:SP23 7:SK02 8:SP01

### 3. 屏風遺跡 第10次調査

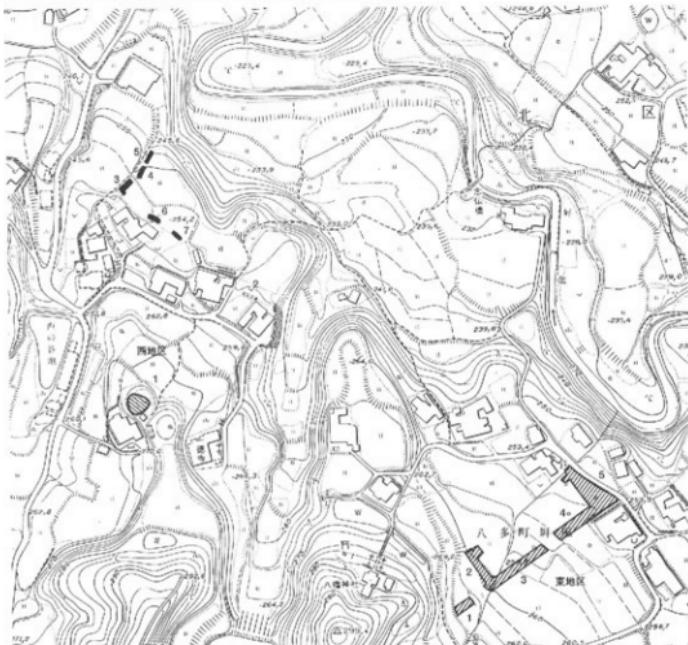
#### 1. はじめに

屏風遺跡は、六甲山系の北側を西流する屏風川付近に分布する。川の両岸は未発達の河岸段丘と丘陵からなり、平野は全く見られない。屏風地区は摂津国有馬郡に属するが、西北側は播磨国美義郡に属する淡河町野瀬地区であり、まさに摂津・播磨国境の村である。

当遺跡は過去の調査結果から、中世～近世にかけての集落遺跡であることが判っている。

今回は、屏風川左岸の丘陵部とその末端が調査の対象地となった。

平成3年4月の圃場整備事業に伴う試掘調査で今回の調査地を含む部分で遺構・遺物が確認された(東地区)。また、平成8年1月の試掘調査では、石組みを持つ近世墓地が確認された(西地区)。今年度は両地区的圃場整備工事によって破壊される部分について発掘調査を実施した。また、試掘調査の段階で調査必要と回答した部分に再度、試掘坑およびトレンチを設定し、発掘調査面積の絞り込みを計った。



#### 2. 調査の概要

工事が予定されている排水路とその末端の切土部分の調査を行った。斜面の高い方(南東地区的調査 西側)から低い方(北東側)に順番に1～5トレンチの番号を付した。

**東-1 トレンチ** 長さ10m、幅4mの調査トレンチで、南西側は削平を受け、北東側は分厚い盛土で整地が行われていた。盛上より若干の土器が出土したが、遺構は検出できなかった。

**東-2 トレンチ** 北半部で土坑2基、ピット1基、浅い小流路1ヶ所を確認した。また、北東側の一部を拡張した結果、掘立柱建物1棟、土坑2基、溝2条、ピット1基を確認した。

**土坑 SK01** 北端部で確認された直径65×75cm、深さ35cm、楕円形の遺構で、底面に長さ50cm、幅10cm、厚さ4mmの板材が入れられ、10~40cm大の角礫と土器がその上に投げ込まれていた。時期は13世紀である。

**小流路** 北端部の上段で検出したが、下段では削平され確認できなかった。浅い小流路または落ち込み状の自然地形と判断される。この堆積土中から、13世紀の土器が集中して出土した。

**掘立柱建物** 東西3間以上、南北1間以上の純柱建物で、柱間の距離は、東西2~2.2m、南北2.6mである。なお、掘立柱建物は土坑SK02、溝SD01,02を切り込んで造られている。

**土坑 SK03** 直径1.1×1.3m、深さ18cmの楕円形の土坑で、底には木灰であったと思われる暗灰色シルトと炭が溜まっており、その上に10~40cm大の角礫と土器を投入している。角礫には、焼けたものがある。出土土器からみて、13世紀の遺構である。

**SK04** SK03の北側に接し、直径1.6×1.8m、深さ25cmの不整円形の土坑で、角礫と土器片が投棄されているが、03ほど多くはない。13世紀の土器が出土している。

**溝 SD01,02** 幅30~40cmのU字形の浅い溝である。いずれの溝も13世紀の土器が出土している。

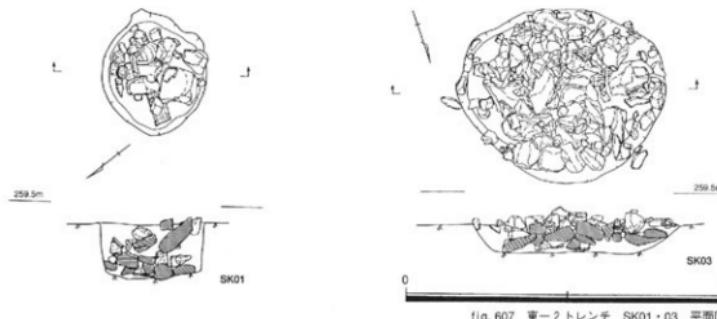


fig. 607 東-2 トレンチ SK01・03 平面図・断面図

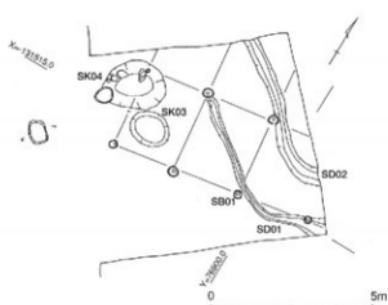


fig. 608 東-2 トレンチ SB01 平面図



fig. 609 東-2 トレンチ 拡張部 全景

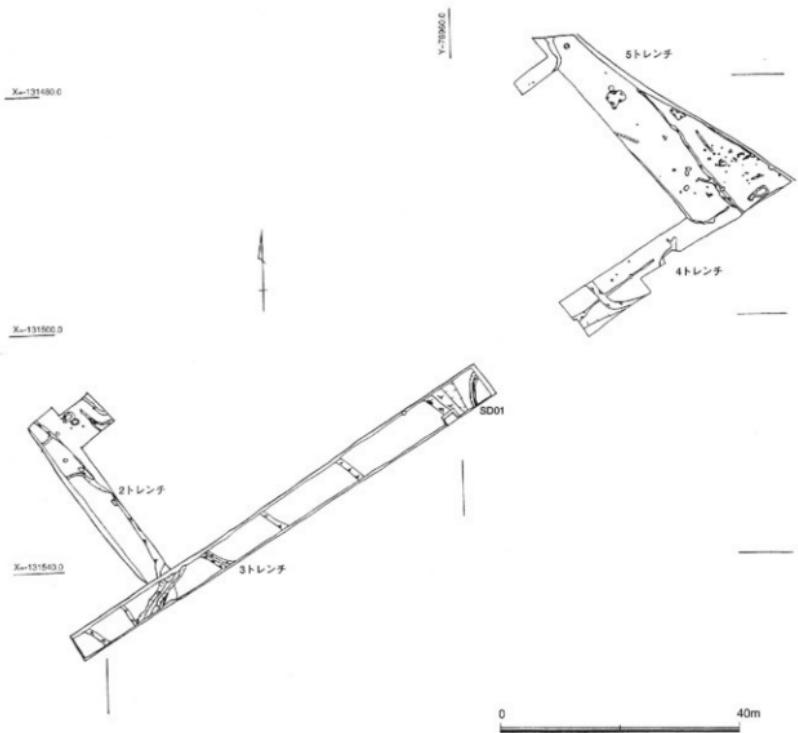


fig. 610 東地区 2～5 トレンチ 平面図



fig. 611 東-2 トレンチ 拡張部 SK03



fig. 612 東-5 トレンチ 遺構検出状況

- 東-3 トレンチ 西半部で近世～現代の水路1条と、東端部で中世の水路1条を確認した。
- 溝S D01 東端部で検出した長さ3m、幅50cm、深さ10～20cmの溝で、部分的に杭を打ち込んでいる。南から北へ流れたと判断される。堆積土は灰色細砂で14世紀の土器を含んでいる。
- 東-4 トレンチ 近世～近代の溝と時期不明のビット3基が検出されただけであった。
- 東-5 トレンチ 北半部は遺構の密度は疎であり、南半部下段に遺構が集中していた。また、ここでは、13～14世紀の土器を含む遺物包含層が確認された。
- 南半部下段 ここでは、ビット30基以上、溝2条、土坑2基が発見された。
- 土坑 SK01 1.5×2.2m、深さ30～40cm、長方形の土坑で、埋土内から14世紀の土器が出土した。
- 東-5 トレンチ 北端部で50×70cmぐらいの四角い礎石が1基検出された。さらに周溝とも考えられる溝が1条確認され、礎石柱の建物が存在する可能性があると想定した。この場所から5～6m北西に南北朝～室町時代ぐらいの五輪塔が記されており、寺があったという伝承もあることから、3×7mの範囲で拡張を行ったが、ビットを1基発見したのみであった。
- 西地区の調査 試掘で発見された墓地址の調査を実施した。[排水路、道路、パイプライン予定部分]
- 西-1 トレンチ 標高278m前後の丘陵頂部に位置し、眺望は良好な場所である。調査は、表土、盛土除去後、墓地の石塔の基底石と判断される石組みを検出した。
- 近世の墓地地址 墓地は、丘陵頂部を7×8mの範囲でコの字形に削り、土手状の高まりを残している。その高まりの両側に北東方向を正面とし、ハの字形に聞く石列を当初は各2列平行に6m程並べていたようである。
- 石塔の基底石は、正面に向かって左側で50×80cmの一部が欠けた一枚石が出土し(S T01)、また右には、100×80cmの石組み(S T02)が造られている。S T01,02の正面には、50cm程度の平たい石が一対置かれ、供物台となっている。右側には100×100cm(S T03)、70×80cm(S T04)、70×90cm(S T05)の石組みが造られている。また、S T02の右側に、小礎が集中するところが認められ、墓石が置かれていた可能性はあるが明らかではない。
- 左側奥は、地山が削り残されて土手状になっているが、墓石が建てられていた痕跡は残っていないなかった。左側手前部分(南西側)に石を並べて3段の階段を設けており、北西側の墓参道とつながる。また、階段の3段目は320×80cmにわたって石を敷き詰めている。



fig. 613 西-1 トレンチ 近世墓地全貌



fig. 614 西-1 トレンチ 近世墓地

火薌闇速遺構

墓地址の南西部分は整地による盛上層となっており、炭やかわらけを多く含む層があることを試掘調査で確認していた。

調査の結果、墓地を造成する以前の斜面地が確認され、その面に掘り込まれた土坑が発見された。土坑とその周辺からは大量の炭、かわらけ、陶磁器、金属製品（鉄・銅釘、火打金、刀子、鎌、金具、煙管、銅錢、絵銭）、火葬人骨が出土した。また、間層を挟んで地山面でさらに1基の土坑を検出した。土坑内とその周辺からは、かわらけ、陶磁器（丹波、肥前系陶磁器）、鉄鎌、若干の火葬人骨が出土した。いずれの遺構も壁面、底面は焼けていない。また遺物の出土状況はまとまりがなく、斜面上方から投げ込まれた様相を呈している。これらの状況から土坑は火葬址ではなく、火葬後の灰を捨てる穴であったと判断される。因みに金属製品は納棺時に納められたらしく、焼けているものが多い。また、出土したかわらけ、陶磁器はすべて割れしており、完形品は皆無である。

西-2~7

## トレンチ

排水路、道路、パイプライン予定部分に、長さ6~20m、幅1~2mのトレンチを設定し、調査を行ったが、遺構は確認されなかった。土層断面を観察すると、傾斜が急な地山斜面上に褐色の土壤化した土層が堆積し(炭片、中世の上器を若干含む)、その上に盛上層が厚く積まれて、水田土壤が水平に堆積しているのがいくつか発見された。この一帯が水田化するのはそれほど古い時代ではなく(おそらく江戸時代のある時期)、それ以前は一部が畠地として利用されていたと想定される。



fig. 615 西一1トレンチ 近世墓 平面図・断面図

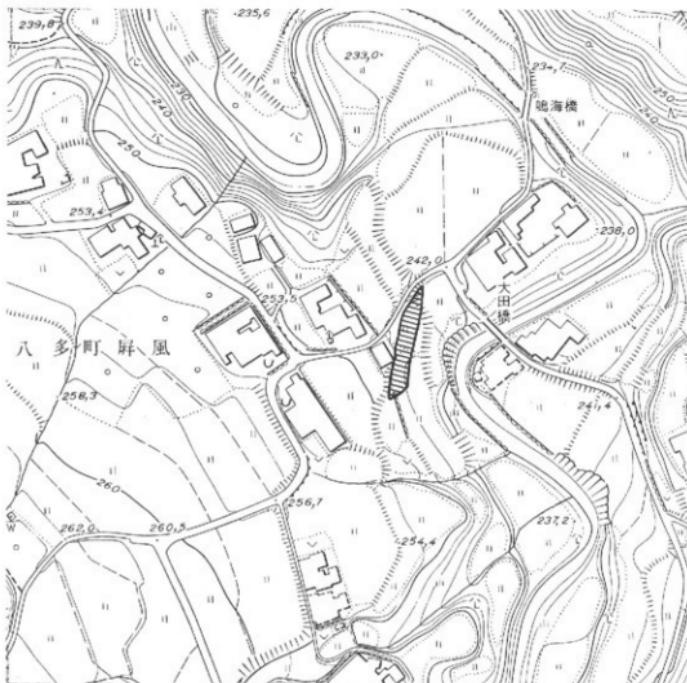
3.まとめ 東地区	東地区では、鎌倉～室町時代の遺構、遺物が確認された。トレチや試掘坑による調査の結果、遺構の分布の密な部分と疎な部分が明確であり、その間は、耕作地、水路が何層も重なった状況を呈している。つまり、水田や畠地の間に屋敷が点在する散村形態であったようである。これは現在の風景とあまり異なっておらず、鎌倉～室町時代からこの地区的景観はさほど変化していないといえよう。
また、何枚か重なる水田層の下には、土壤化した層が、地山斜面の傾きに沿って堆積している状態が数ヵ所確認されており、丘陵の緩傾斜をまず畠地として開墾し、徐々に水田化していく過程が窺われる。上層の水田層や水路からの出土遺物と付近から検出された遺構からみて、鎌倉時代の中期～後期にかけて開発の手（畠地化の開始）が入りはじめ、室町時代には水田化が進み、江戸時代には水田の安定化が完了したものと判断される。	
西地区	西地区では、江戸時代中期の火葬関連遺構、中期～後期の墓地址が確認された。火葬関連遺構は、火葬した骨・灰を捨てる穴であり、大量の炭やかわらけ、金属製品、火葬人骨が出土した。これらの遺物から、当時の葬送儀礼の一端が窺われる。また、煙管や鉄の出土は火葬された人物が男性、女性両方であったことが想定される。
やがて、それらを整地して墓地が造られる。石塔の基底石の石組みが出土した。5基の石組みが確認できたが、実際はもっと建っていた可能性が高い。いずれも、墓塔のみが建ち埋葬主体がない詣り墓である。正確な時期は判らないが、江戸時代中期～後期に造られたのは間違いない。	
土層の堆積状況や遺物の出土の様子からみて、火葬関連遺構と墓地址については次のような造成・利用・放棄の過程が窺える。	
<p>①丘陵頂部が火葬場に選定され、南西の斜面に穴が掘られる。穴の中に火葬後の灰・骨・金属製品、葬送儀礼に用いたかわらけ、陶磁器が捨てられる。</p> <p>②丘陵頂部が整形され、平坦面を造り出したらしく、その土砂が斜面に捨てられる。それが斜面の穴を埋める。さらにその土砂で斜面を若干整形し、かなり大きな二重の窪みを造りだす。その窪みに炭、灰・骨、金属製品、かわらけ、陶磁器を大量に捨てる。</p> <p>③斜面の窪みが捨てられたもので相当埋まった後、丘陵頂部がさらに整形される。斜面が埋められて平坦面が拡張され、墓地が造られる。この段階で、火葬した痕跡は完全に削平されている。</p> <p>④並べられていた墓塔が明治時代以降の墓地整理によって移転し、基底石の石組みだけが残され、今日に至る。</p>	
現在の屏風地区は、土葬が行われており、埋め墓と詣り墓を持つ両墓制が受け継がれている。今回確認された火葬関連遺構は現在の葬法と隔たりがあることが判り、注目される。江戸時代の中期～後期にこの遺構が埋め立て、整地され、詣り墓が造られることから、この段階に葬法の変化が起こったことが指摘できる。その理由は今のところ不明である。ただし、この地での火葬が当時において普遍的な葬り方であったかは判らず、極めて特殊な葬法であった可能性もある。今後の類例の増加を待つしかない。	

## 4. 屏風遺跡 第11次調査

### 1. はじめに

北区八多町屏風は三田から三木に抜ける街道筋に所在し、旧摂津国と旧播磨國との境界に位置している。

屏風遺跡ではこれまでに10次にわたる調査が実施されており、縄文時代の石器や中世後半から末にかけての掘立柱建物や墓址のはか、最近の調査では近世の墓址なども発見されている。



### 2. 調査の概要

今回の調査は新設のゴルフ場の進入路部分について実施した。この進入路に関する調査については、平成4年度に実施した調査で中世の掘立柱建物2棟や土坑などを検出しているほか、昨年度に実施した9次調査でも中世の掘立柱建物1棟などを検出している。調査は残土置場の都合により、まず北半部について実施した。最北端の田圃部分については、現況水路の擁壁保護等のため調査対象地から除外した。その南側の調査区について調査を実施した。重機により耕土以下の土層を掘削したが、耕土・床上の下層には全面に盛土が70cm程度堆積しているほか、北側については流土を挟んですぐに地山面を検出した。地山面の上面は人為的な改変を受けており、凹凸が激しい。

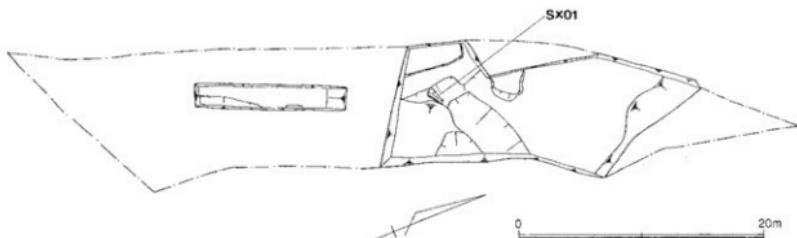


fig. 617 調査区平面図

### S X01

調査区の南部で溝状の落ち込み 1ヶ所 (S X01) を検出し、内部より中世の須恵器壺や土師器鍋などが出土した。

幅50cm、長さ1.5m、深さ25cmを測る溝状の落ち込みである。中世の須恵器壺や土師器鍋などが出土している。土師器鍋から判断すれば、13世紀代の遺構と考えられるが、後世の削平を著しく受けしており、遺構の性格等は不明である。

北半部の調査において当初予想された程に埋蔵文化財の存在が確認されなかったことから、南半部についてはトレンチ調査に切り換えて調査を実施した。その結果、埋蔵文化財は確認されなかった。また、現地形も既に一部改変されて盛土が行われており、埋蔵文化財が存在する可能性は低いと考えられ、調査を終了した。

### 3.まとめ

今回の調査では溝状の落ち込み 1ヶ所を検出したが、そのほかには埋蔵文化財の存在は確認されなかった。地形的にも谷地形の谷底付近に位置していることに加えて、時期不明ながら地山まで造成が及んだあと盛土を行い田圃として利用されており、埋蔵文化財の抜がりは確認されなかった。従来の調査成果と考え合わせると、当遺跡の中心は北及び南の高位の場所に位置するものと考えられる。

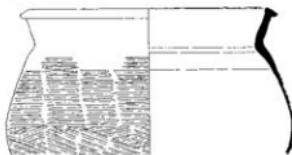


fig. 618 SX01 出土遺物 実測図

えいばら にしとうようら みやのもと  
5. 宅原遺跡 西豊浦地区・宮之元地区

## 1. はじめに

宅原遺跡は、これまで北神ニュータウン関連事業、圃場整備事業、道路建設事業に伴う近年の調査で縄文時代から近世に至るまでの複合遺跡として周知されている。

今回の調査は、污水管布設工事により破損を受ける内法幅110cmの部分について調査を実施した。



fig. 619  
西豊浦地区  
調査位置図  
1:3,000

## 2. 調査の概要

調査区は大別して、西豊浦地区と宮之元地区に二分される。西豊浦地区は、第1～5調査区に分かれ、宮之元地区は第1・2調査区に分かれる。

長野川右岸の低段丘上の北端部に位置する西豊浦地区は当遺跡の最西端にあたり、平安時代末期の橋梁状遺構などが見つかっている。また、長尾川右岸の丘陵から延びた低段丘上に位置する。調査区は、5区に分かれ、各調査区の状況の概要は、表1にまとめたとおりである。

調査区	検出状況
第1調査区	(A)：中世遺物包含層下で、溝4条、土坑2基、ピット3基を検出。
	(B) (C)：溝3条、ピット多数検出。
	(D)：溝2条、土坑2基、ピット2基を検出。以南では遺構、遺物は存在しない。
第2調査区	(E)：土坑2基 (SK01は鎌倉時代後半)、近世の落ち込み検出。
第3調査区	(F)：中世の落ち込み
	(G)：水田畦畔、土坑1基、溝1条検出。(水田埋土から中世の須恵器出土)
第4調査区	(H)：幅60～70cm、深さ40cmの東西方向の溝。(古墳時代後期の須恵器・土師器出土)
第5調査区	(I)：径1.1m、深さ0.3mの焼土坑1基 (中世の土師器出土) 以南は谷状地形となり、古墳時代の須恵器、中世の須恵器・陶器が出土

表1 西豊浦地区 遺構検出状況の概要 (A～Iは、地点を表す)

宮之元地区 調査区の中央部（J）で、第1調査区 黄灰色シルト層の遺構面で井戸、溝1条、土坑1基を検出した。



fig. 620  
宮之元地区  
調査地位置図  
1:2,500

**井戸 S E 01** 井戸の掘方の形状は、一辺3.5mの隅丸方形で深さ2.3mを測る。井側は一辺約3.5mの方形で、一辺に3枚の継板を置き、上下2段の横柵を渡して組み合わせた横柵継板形の井戸である。井戸の上層からは、須恵器椀、土師器皿、青磁等が多量に出土した。井戸の底部には、曲物が一段据え置かれていた。これらの遺物からして井戸は鎌倉時代前半頃と思われる。井戸の北側で検出した溝からは、鎌倉時代頃の須恵器が少量出土した。

第2調査区 調査区の中央部（J）で、平安時代前半の須恵器、土師器を多量に含む遺物包含層下で黄灰色シルト層の遺構面で溝8条、土坑2基、不明遺構3基、ピット多数を検出した。



fig. 621 宮之元地区 井戸 SE01 掘出状況



fig. 622 同左の井戸枠構造の状況

## 3.まとめ

今回の調査は、西豊浦地区と宮之元地区の二地区に分けての広範囲に及ぶもので、宅原遺跡の一端が窺えた。西豊浦地区の過去の調査では、古墳時代の溝や、杭列、護岸、井戸が見つかっている。第4調査区で検出した東西方向の溝も位置的には近接し、出土遺物も時期的には同じである。またこの調査区の近くでは、この時期の水田も確認されている。宮之元地区においても、過去の調査で、7世紀代の竪穴住居、掘立柱建物、8世紀代の掘立柱建物、12世紀代後半から13世紀代の掘立柱建物が見つかっていて、飛鳥時代・奈良時代前期・鎌倉時代の集落がこの地に形成されていたものと考えられる。また、奈良時代前期の遺構から出土した木彫面、墨書き器からして官衙的な特徴をもつ遺跡といえる。今回の調査で見つかった井戸は13世紀代頃のもので、この時期の集落の一端を窺わせる資料となつた。検出された井戸の枠部材については、樹種同定を行つた。その結果、井戸枠材の各部位によつて、用材の樹種を選択的に採用していることが明らかとなつた。また、隣接する豊浦地区で見つかっている井戸も13世紀代に相当し、部材構造も類似している。

以上のように、限られた調査範囲の中で過去の調査を追従する形の成果ではあったが、宅原遺跡の集落の一端を確認することができた。

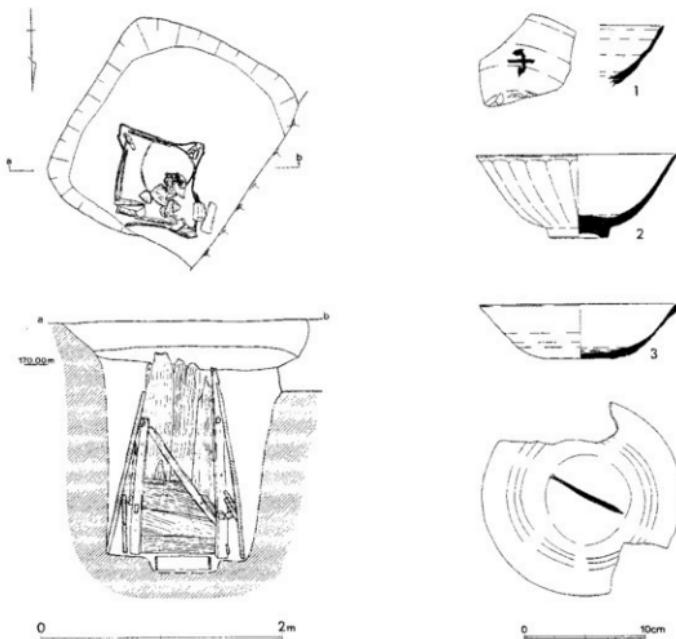


fig. 623 宮之元地区 井戸 SE01 平面図・断面図及び出土土器実測図 (1・3:須恵器 2:青磁)

## 宅原遺跡宮之元地区（宅原下水）出土木材の樹種同定

1. はじめに 神戸市北区長尾町にある宅原遺跡（宮之元地区）出土木製品について調査した。これらの木製品は12世紀の掘立柱建物に付隨する井戸の横桟、横板、縦板、角柱、山物、棟木計31点である。井戸の形状は一辺3.5mの隅丸方形で、深さ2.3mである。井戸の一辺に3枚の縦板と上下2段の横板が組み合わされている。これらの木材の樹種を調べることにより、宅原遺跡の木材利用を明らかにすること目的として、樹種を調べた。

2. 方法と記載 同定には、木製品から直接、もしくは切り欠いたサンプルから片歯剥刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版a）、接線断面（板目と同義・写真図版b）、放射断面（柾目と同義・写真図版c）の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とともに同定根拠を後述する。結果は、表1宅原遺跡（宮之元地区）出土木製品の樹種同定結果に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、㈱パレオ・ラボで保管されている。

### 同定根拠

#### モミ属 *Abies* sp. PINACEAE

写真図版1a～1c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材の移行は緩やかで、年輪界は明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり單列。その水平壁には單穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、1分野に1～4個程度。

以上の形質より、マツ科のモミ属の材と同定した。いずれも常緑高木の針葉樹である。

#### アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. PINACEAE

写真図版2a～2c

水平・垂直両樹脂道とともに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエビセリウム細胞が見られる。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射組織の上下端に放射仮道管があり、水平壁には鋭角な鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、1分野に1～2個。

以上の形質から、マツ科のアカマツの材と同定した。常緑高木の針葉樹で、北海道～鹿久島の温帯～暖帯にかけて分布する。

#### ツガ属 *Tsuga* sp. PINACEAE

写真図版3a～3c

垂直・水平両樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材にかけての移行はやや急で、晩材部の量は多く、年輪界は明瞭。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり単列。放射組織の上下端に放射仮道管を持つ。放射柔組織の水平壁には單穿孔が著しく数珠状を呈す。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で1分野に1～4個存在する。

以上の形質により、マツ科のツガ属の材と同定した。ツガ属にはツガとコメツガ2種が含まれるが、いずれも常緑高木の針葉樹である。

#### コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. SCIADOPITYACEAE

写真図版4a～4c

水平・垂直両樹脂道と樹脂細胞を持たない針葉樹。早材から晩材にかけての移行はやや緩やか。放射組織は、単列ですべて放射柔組織から構成される。分野壁孔は小型の窓状。

以上の形質により、コウヤマキ科のコウヤマキの材と同定した。コウヤマキは、本州（福島県隔離分布）～九州（宮崎）まで分布する常緑針葉樹である。

#### クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. FAGACEAE

写真図版5a～5c

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は單一。木部柔組織は、晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列同性で、道管との隙孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道～九州までの温帯～暖帯にわたって広く分布する落葉性高木、あるいは中高木である。

#### シキミ *Illicium anisatum* L.; *I. religiosum* Sieb. et Zucc. ILLICIACEAE

写真図版6a～6c

極めて小型の角張った道管が均一に散在する散孔材。年輪のはじめに道管が一列に並ぶ傾向がある。道管の大きさは、年輪内で変化なく、年輪界は不明瞭である。道管の穿孔は、横棒が非常に多い階段穿孔で、内壁に不明瞭な螺旋肥厚を持つ。放射組織は1～2列で異性。

以上の形質から、シキミ科のシキミの材と同定した。シキミは、本州（宮城県以南）～琉球の暖帯～亜熱帯に分布する。

#### 3. 考察

今回調べた製品はSE01遺構（12世紀）の横棟継板形の井戸枠の構成材である。樹種同定結果を木製品毎に分けて集計すると、部位毎に樹種が集中している事が分かる（集計結果：表2）。

これらの木製品は部位毎に樹種も異なる。四方の隅の角柱にはクリ材を（コウヤマキは東辺の出土である）、横棟にはアカマツ、横板・継板にはモミ属が選択されている。継板のツガ属や、横棟のコウヤマキは、補足的に使用されたのか、それとも、後年の補修等の影響であるかどうかは現地での所見を含めた考察が必要である。

材質的には、クリ・アカマツは水湿に強く、井戸枠の様な水湿が絶えないような箇所には適している。モミ属は材質が軽軟であるが、8世紀の山王遺跡、弥生後期の岡山県の上東遺跡など、井戸枠材での確認事例が多い（松葉・鈴木 1997、島地他 1988）。棟木は、検出点数が1点のみであるので、意識的選択かどうかは不明である。

今回の結果から、井戸枠の部位毎に木材選択があることが分かった。横棟・角柱・継板の様に、1点だけ異なる樹種が使用されている部位は、この部位が他の部材と同時期に使用された製品であるのか、それとも後世の補修等による製品であるのか等を踏まえた上で、性格を決定する必要がある。

部位名	モミ属	ツガ属	アカマツ	コウヤマキ	ヒノキ属	クリ	シキミ	総計
横 棟				6	1			7
横 板	7							7
角 柱					1	4		5
曲 物						1		1
棟 木							1	1
継 板	9	1						10
総 計	16	1	6	2	1	4	1	31

表1 SE01の部位樹種別集計

表2 宅原遺跡出土木製品の樹種同定結果

樹種	遺物番号	遺物名	層位	備考
クリ	W-22	角柱	S E 01	北東隅
モミ属	W-23	縦板	S E 01	東辺-北端
モミ属	W-6	縦板	S E 01	東辺-真中
アカマツ	W-38	横桟	S E 01	東辺-一段目
アカマツ	W-26	横桟	S E 01	東辺-二段目
モミ属	W-29	横板	S E 01	東辺-二段目
モミ属	W-30	横板	S E 01	東辺-三段目
クリ	W-4	角柱	S E 01	南東隅
モミ属	W-1	縦板	S E 01	南辺-東端
モミ属	W-2	縦板	S E 01	南辺-裏側
モミ属	W-3	縦板	S E 01	南辺-裏側
アカマツ	W-8	横桟	S E 01	南辺-二段目
モミ属	W-48	横板	S E 01	南辺-一段目
モミ属	W-42	横板	S E 01	南辺-二段目
クリ	W-40	角柱	S E 01	南西隅
モミ属	W-45	縦板	S E 01	西辺-北端
モミ属	W-43	縦板	S E 01	西辺-真中
コウヤマキ	W-35	横桟	S E 01	西辺-一段目
アカマツ	W-7	横桟	S E 01	西辺-二段目
モミ属	W-46	横板	S E 01	西辺-三段目
クリ	W-10	角柱	S E 01	北西隅
ツガ属	W-19	縦板	S E 01	北辺-西端
モミ属	W-20	縦板	S E 01	北辺-真中(二分割)
アカマツ	W-9	横桟	S E 01	北辺-二段目
モミ属	W-32	横板	S E 01	北辺-一段目
モミ属	W-34	横板	S E 01	北辺-三段目
シキミ	W-47	桿木	S E 01	北辺
アカマツ	W-39	横桟	S E 01	南辺-一段目
ヒノキ属	W-51	曲物	S E 01	最下層
モミ属	W-12	縦板	S E 01	東辺-南端
コウヤマキ	W-25	角柱	S E 01	東辺

引用文献 松葉礼子・鈴木三男, 1997. 多賀城市山王遺跡八幡地区出土木質遺物の樹種同定. 山王遺跡 I, 多賀城市教育委員会. 建設省東北地方建設局, 180-191pp.

島地謙・伊東隆夫・林昭三・鈴木三男・光谷拓実・布谷知夫・能城修一, 1988. 日本の遺跡出土木製品総覧, 296pp, 雄山閣, 東京.

写真図版1

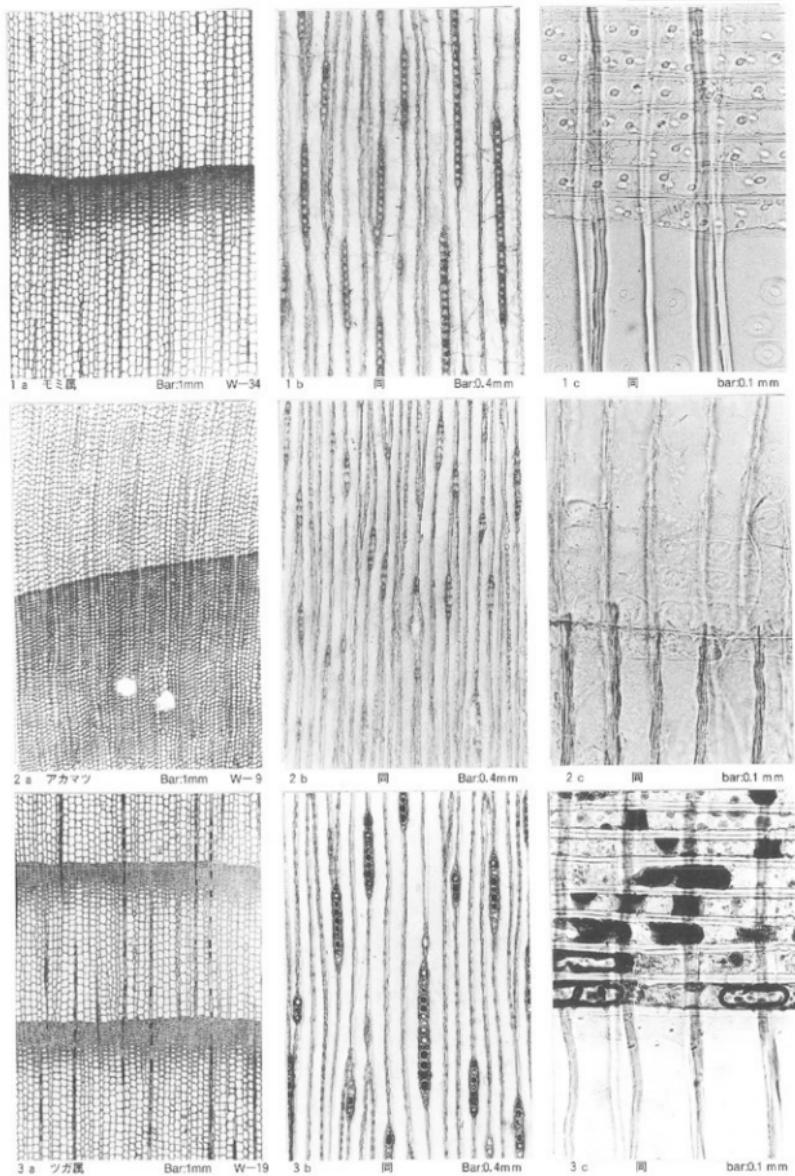


Fig. 624 宅原道路(宮之元地区)の木材組織断面写真(1)

写真図版2

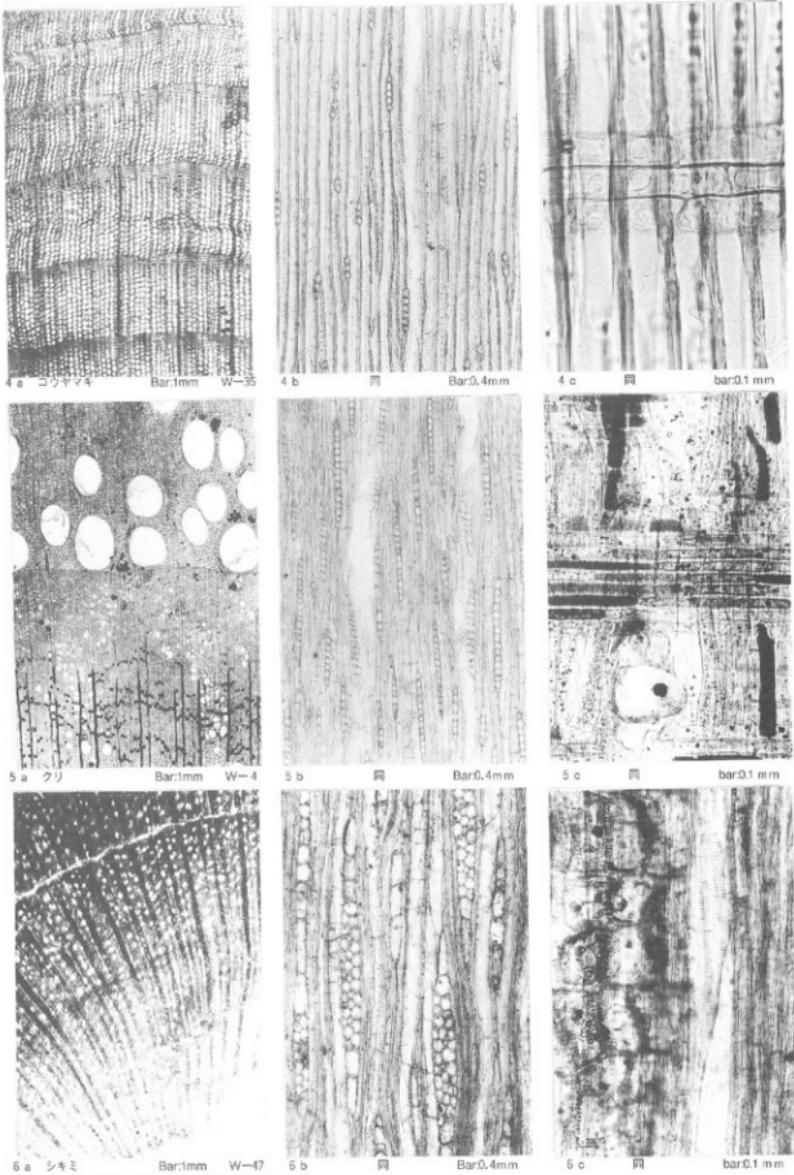


Fig. 625 宮原遺跡(宮之元地区)の木材抽離微鏡写真(2)

## 1. はじめに

淡河町勝雄地区は、淡河町の西端に位置し、西は三木市志染町、北は美嚢郡吉川町に接する地域である。加古川の一支部淡河川は八多町屏風付近を源として西に流れ、淡河町の谷平野を形成し、勝雄地区南西部にあたる谷の狭隘部で北流して志染川に合流する。勝雄遺跡は、この淡河川の中流域の右岸に位置し、淡河川の流域のなかで最も谷平野が発達した地域に占地している。今回の調査地は、比較的広い谷平野の北側、発達した河岸段丘の突端に位置し、後背湿地との比高差はおよそ8.0mを測る。

今回の調査地南東部の自然堤防上には、鎌倉時代に勅續されたとされる淡河八幡神社が鎮座し、現在の社域となっている社からは、室町時代の土師器皿・瓦片・須恵器片などが出土している。また、淡河川の対岸には鎌倉時代～戦国時代の淡河氏の居城である淡河城を望むことができる。

調査地付近は、昭和40年代から淡河天満宮を中心として、須恵器・土師器などの遺物の散布地として知られ、平成6年度土地改良事業に伴って実施された試掘調査においても、天満宮と淡河八幡神社の周辺に設定した試掘坑から遺構・遺物が検出された。試掘調査の結果をうけて、土地改良事業の実施設計がなされた結果、天満宮の北側排水路（第1トレンチ）、天神池西側の水田切土部（第2トレンチ）、第2トレンチ西側の南北排水路の一部（第3トレンチ）について調査を実施することとなった。



fig. 626  
調査地位図  
1:2,500

2. 調査の概要 全長 136m、幅 3~4 m の水路部分の調査区であるが、現況の側溝の保護のため、調査第1トレーンチ 不能の部分があり、実際に調査を実施した幅は 2.1~3.8m である。便宜的に北東側より 1~4 区の小地区を設定して調査を行った。

ピット 1 区でピットを 18 基検出した。直径 20cm 前後のもので、深さは深いもので 20cm 程度である。掘立柱建物としてのまとまりを確認することはできなかったが、なかには礎板と思われる人頭大の石が 3 個充填されていたもの (SP08) あり、掘立柱建物の柱穴も含まれていると考えられる。ピット内からは少量の土器しか出土しておらず、不明であるが、中世のものと考えられる。

SX01 4 区で検出した落ち込みで、全体の形状は不明だが、長方形状に 15×3 m の範囲にわたって緩やかに削り込んだ内部の 5.7×1.0m の範囲を 10~17cm の深さで一段削り窪めている。埋土からは、奈良時代後半~平安時代前半、中世の土器が出土している。

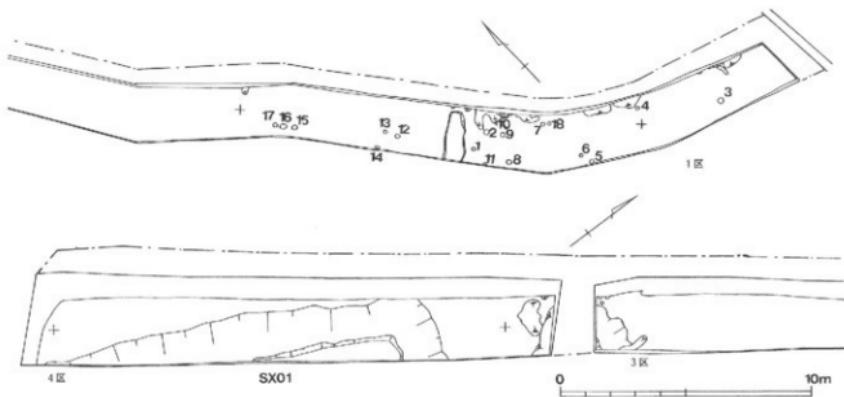


fig. 627 第1トレーンチ 進捗平面図



fig. 628 第1トレーンチ1区 全景



fig. 629 第1トレーンチ4区 SX01

第2トレンチ 基本層序は、耕作土・床土・旧耕作。その下層に室町時代・奈良時代の遺物包含層である明灰色粘性砂質土が調査区全域に堆積していた。全体の傾向として、北西～南東に傾斜して、所々に旧地形と考えられる落ち込みを検出した。この落ち込み内からは、室町時代の須恵器などが出土していて、調査区全域を平坦に造る作業が行われたと推定される。調査区南西部で検出した畠状遺構は、室町時代以降は水田化への痕跡と考えられる。

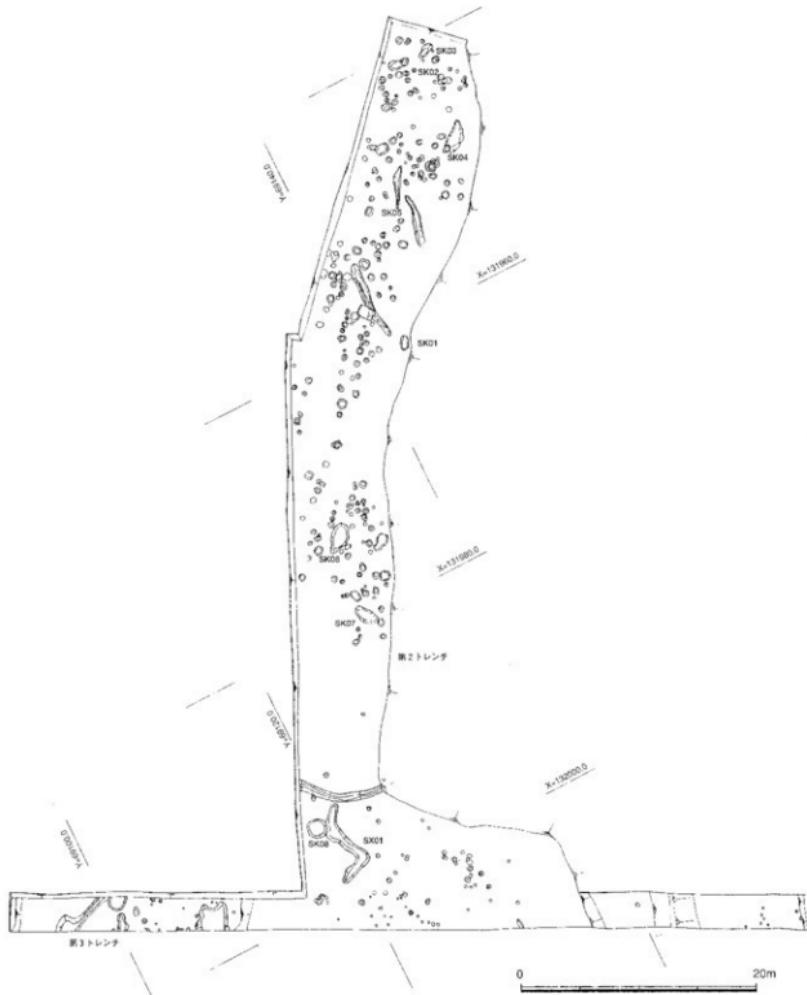


fig. 630 第2・3トレンチ 遺構平面図



fig. 631 第2トレーニチ 全景



fig. 632 第2トレーニチ中央部 ピット群

### 柱穴群

調査区の南部でも検出されたが、特に調査区中央部から北部で高い密度で検出された。柱穴の多くが、直径25cm前後、深さ20cm前後の円形の掘形であるが、中央北よりに検出した柱穴群は、一辺50cm前後、柱痕跡径20cm前後の方形の掘形で、柱の抜き取り痕跡の明瞭なものも一部にある。柱穴群の上層からは、奈良時代後期後半の須恵器が比較的多く出土しているが、建物としてはまとまらなかった。

### 土坑

検出された土坑の規模等は、以下の表にまとめたとおりである。

遺構名	規 模 (m)	平面形	出土状況
S K01	長径1.2・短径0.7・深さ0.25	楕 円	断面形舟底状。人頭大～拳大の河原石、須恵器出土。
S K02	長径1.2・短径0.4・深さ0.21	長楕円	中央部が深くなる。出土遺物なし。
S K03	長径1.5・短径0.7・深さ0.10	不定形	断面形皿状。出土遺物なし。
S K04	長径3.0・短径1.2・深さ0.20	不定形	断面形皿状。出土遺物なし。
S K05	長さ3.6・幅 0.6・深さ0.10	溝 状	断面形U字状。出土遺物なし。
S K06	長径2.8・短径1.5・深さ0.20	不定形	断面形皿状。出土遺物なし。
S K07	長径1.7・短径1.1・深さ0.20	不定形	断面形舟底状。埋土から須恵器・土師器が出土。
S K08	長径1.7・短径1.1・深さ0.21	円 形	断面形皿状。出土遺物なし。

性格不明遺構 調査区南部で鍵形の溝状遺構を検出した。幅80cm、深さ10cm前後で断面U字形である。

S X01 南側コーナー部で土師質土器が出土した。

第3トレーニチ 東よりA～D区の小地区を設定した。C区は第2トレーニチと接している。

A 区 3面の遺構面を検出した。第1遺構面は、ピット8基を検出した。S P08は深さ28cmで、柱抜き取り後に拳大の礫を数個投げ込んでいる。第2遺構面は、溝状の落ち込みなどを検出した。第3遺構面は、ピット2基を検出した。

B～D区 B区では、ピット1基を検出した。C区では、ピット、落ち込みなどを検出した。D区では、2面の遺構面を検出した。第1遺構面は、鋤溝状の遺構を確認し、第2遺構面では落ち込み3ヶ所、畦1条、ピット多数を検出したが、建物としてはまとまらなかった。

### 3.まとめ

これまで北区淡河町地域における最も古い集落例は、土地改良事業に伴う淡河城の調査で発見された弥生時代後期末の頃と推定される竪穴住居址の例があるが、その実態は明確でない。今回の調査では、建物の形態は明らかでないが、多数の柱穴を検出し、一部で奈良時代の土器が検出された。この結果、淡河川右岸勝羅地区では遅くとも奈良時代後期には開拓が開始され、中世段階には文献などにみられる寺領経営に組みこまれたと考えられる。その一部が、今回の調査で検出された柱穴群であると推定される。